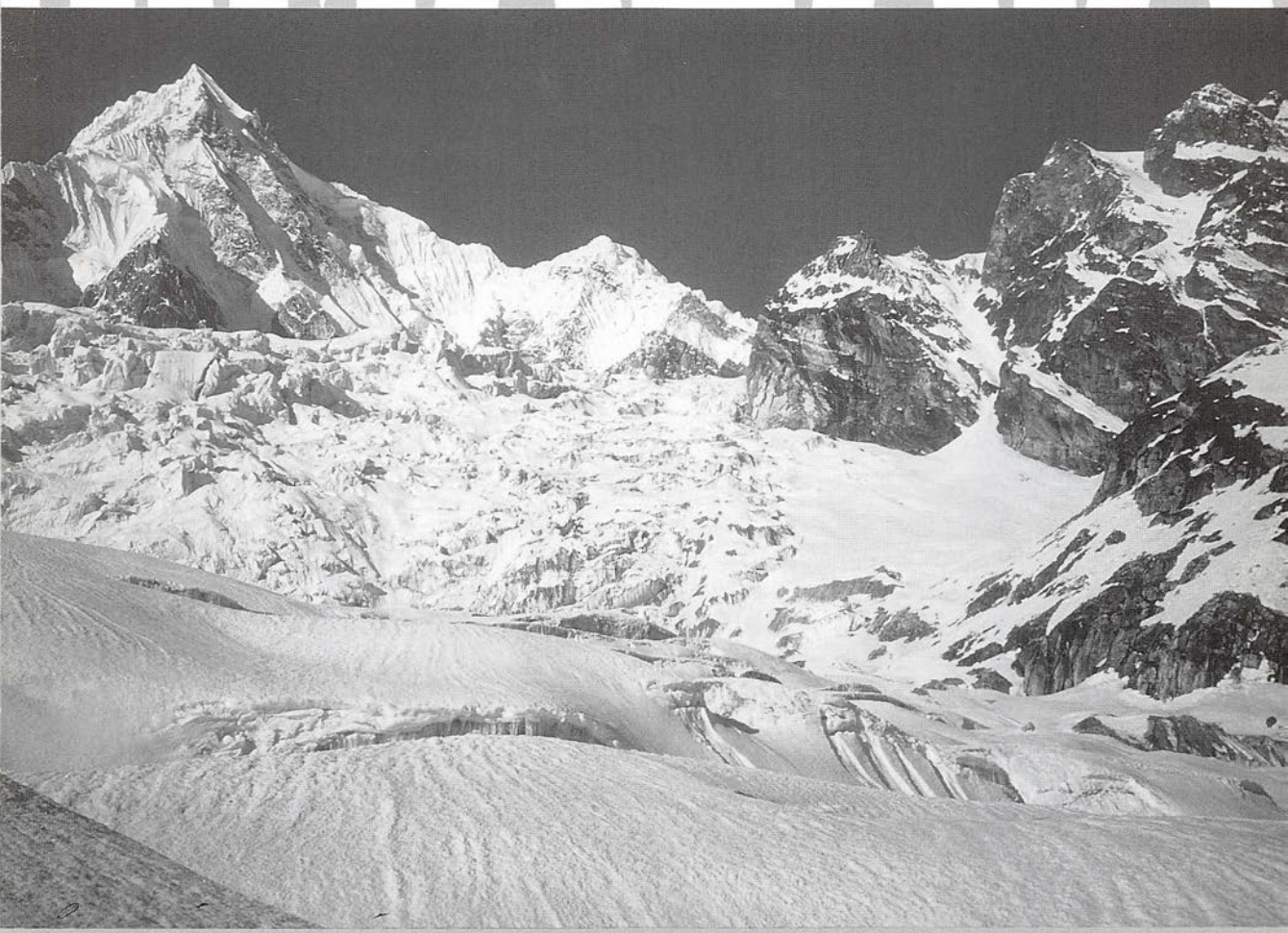
昭和51年5月9日第三種郵便物認可　平成7年11月1日発行（毎月一回1日発行）　ISSN 0385-5457

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 288



1995 NOVEMBER

日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN —— HAJ

ＨＡＪから募集のお知らせ

30周年記念行事

本会は２年後の1997年10月に創立30周年を迎えます。これまでも節目ごとに記念行事が検討されましたが、これまでは諸般の事情で実施されるまでには至っていませんでした。

本年５月27日開催の理事会に於て、30周年記念を迎えるにあたって「Ⓐ諸外国からのゲストを迎えての行事・式典」、「ⒷＨＡＪ30年誌の発行」「Ⓒ記念野外活動（登山を含む）」の３項目について常務理事会で分担して進行することが決定されました。

現在のところ常務理事会の分担としては、Ⓐを八木原常務理事、Ⓑを山森専務理事、Ⓒを尾形常務理事がそれぞれチーフとなって進めることになりました。

そこで会員の皆様からそれぞれの項目について提案、アイディアを募集致します。特に所定の用紙はありませんのでＨＡＪ事務局宛郵送・ＦＡＸでお寄せ下さい。

合同登山隊員

ＨＡＪではチベットと合同登山を協議中です。目標の山については、２～３に絞っていますが、対象は７千メートル以上の山で、あまり登山記録のない山、日本人未登の山、未踏峰です。隊員数など状況が許せば複数の山も考えています。

合同登山は立場の違いを理解してはじめて成り立ちます。今回の合同は特に合同でなくとも許可取得できる山です。

情報の少い山で異文化の民族との合同登山の実践を希望する真摯な岳人の応募を期待します。

記

１．登山期間予定：1997年春
２．場所：中国、チベット自治区ヒマラヤ山脈
３．個人負担予定額：100万円程度
４．募集人員：10名
５．資格：冬山５年以上
６．申込み先：ＨＡＪ事務局宛

表紙写真

シニオルチューとは標高7,000ｍにとどかず、未登峰ではないのだが、この山に魅了された私達にとって、それらは余り大きな問題ではない。５月２日シニオルチュー氷河へ入り、第一アイスフォール帯にルートを作る。遥か彼方には憧れのシニオルチューがピラミダルな姿で峻立していた。
（東北大学医学部シッキムヒマラヤ学術登山隊）

ヒマラヤ No.288

1．シニオルチュー登頂
12．ラダック南東部遠征報告　ハリシュ・カパディア
16．ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・ヒマラヤから・インフォメーション〉
18．Books
19．ヒマラヤ登山大量遭難の実態　山森欣一
22．1995年秋期ネパール・ヒマラヤ登山隊一覧
24．寸感・事務局日誌

シニオルチュー登頂

－その氷のピラミッドを見た瞬間、全地球にこれ
に匹敵する山はないと誰にも憧れをおこさせる－

東北大学医学部シッキムヒマラヤ学術登山隊

－かくていよいよ頂につきて北の空を望めば、青山重々と連れる彼方の空に堂乎として妙光天を衝く雪峰を見る。彼の円錘形の如く光れるものは、シニオルチュ雪峰なり－

1914年１月、仏僧としてシッキムよりチベットへ一人旅した河口恵海はこの「世界で最も美しい山」と讃えられた名峰の姿をこう描いている（「第二回チベット旅行記」講談社学術文庫）。師が日本人として初めてシニオルチュ雪峰を眼前に見てから80年後の今春、私達はその頂に立った。

シニオルチュー（6,887ｍ）は世界第三位の高峰カンチェンジュンガの東15kmに位置し、1936年ドイツ、パウルバウアー隊によって初めて登られている。戦前二度カンチ北東稜に挑み、ナンガ・パルバットでは大雪崩で多くの仲間を失ったバウアーであるが、彼の8,000ｍ峰の登攀は失敗に終わったにもかかわらず今世紀ヒマラヤ登山史の礎となる水準の高いものと評価されている。一方、彼がシニオルチューに登った1936年のエクスペディションは、ゼム氷河の秀峰群に遊ぶ放浪の旅のような自由で気楽な雰囲気があり、当時の記録は何度読んでもその登山が本当に楽しかったことが感ぜられるのである（〝Himalayan Quest〟1938年）。その時の彼の登山スタイルは、今日のＨＡＪのライトエクスペディション、ラッシュアタックの考え方に近い。それにこの時はなんと彼の愛犬ワスルも6,000ｍまでいって一緒にビバークしているのである。地球の温暖化によるのであろうか、この地域の氷河は初登された60年前に比べて大幅に後退しており、又積雪やアイスフォールの状態も大きく違っていると思われるので、今では昔のように愛犬を連れて登ることは難しそうだ。

私達はシニオルチュー登山を行うにあたって当り前のことであるが「登って全員無事に帰ってくること」が何より重要だと考えた。シニオルチューは急峻で降雪量が多く、日中は気温が高いので雪崩の危険も高い。バウアー隊以後のスイス、インド、スロベニア各隊はいずれも初登時のルートである北西稜をたどっており、私達もやはりこのルートを登頂ルートに選んだ。

〈隊の概要〉

１．目的：インド・シッキムヒマラヤのゼム氷河を辿り、シニオルチュー（6,887ｍ）に登頂する。
２．登山期間：1995年４月２日－６月７日
３．登山隊の構成：隊長＝片山正文（44）、隊員＝平泉　宣（37）、松木克雄（39）、後藤　均（37）、千田雅之（34）、保坂正美（31）、市川宏文（31）、小山　敦（29）、太田尚志（27）、涌沢亮介（24）、中野岳人（22）、山口正人（46）、能勢眞人（50）、総隊長＝佐藤春郎（75）、学術隊長＝葛西森夫（73）、（以上、東北大学医学部艮峻（ごんりょう）山の会）リエゾンオフィサー＝メジャー・プラビン・ガングアニ（30）、ナク・ギリ（24）、ハイポーター＝ミグマ・シェルパ（50）、ニマ・ドルジ（30）、パサン・シェルパ（31）、ダワ・シェルパ（26）、ランドウ・シェルパ（22）、コック＝デネシ・バット、テラ・トラジ、パサン・トラジ、ガイド＝キャプテン・ワサン、パサン・シェルパ（シカールトラベル）
４．キャンプの高度：ＢＣ（4,570ｍ）、ＡＢＣ（4,700ｍ）、Ｃ１（5,300ｍ）、Ｃ２（6,000ｍ）、ＡＣ（6,450ｍ）
５．登山の結果：５月21日千田、太田の２名が登頂。

＊　　＊　　＊

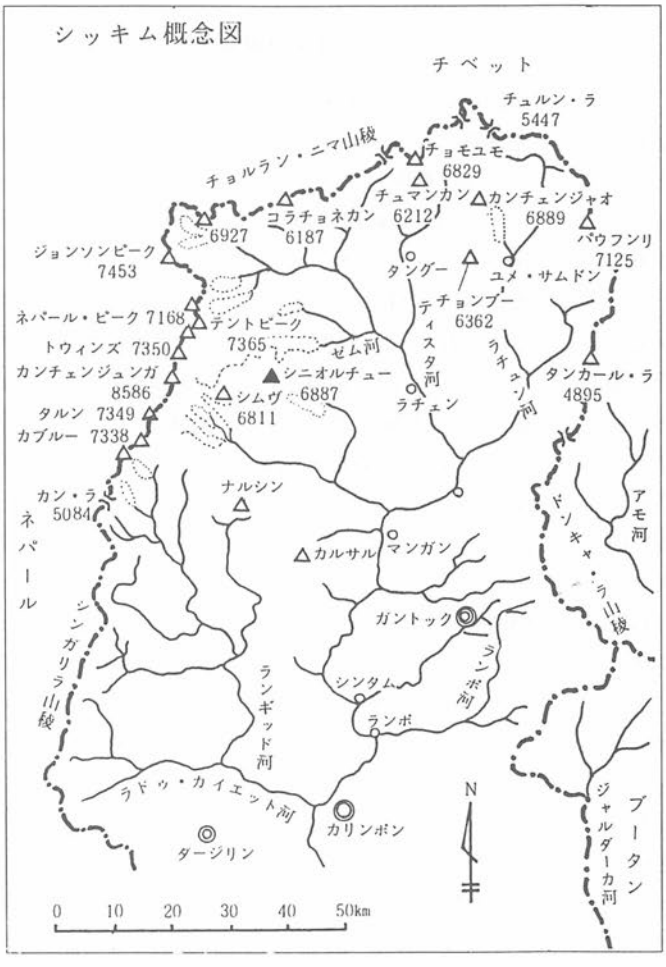
昨春の偵察（ヒマラヤ273号掲載）の後、登山準備にあたって気をつけたことをあげてみたい。1）シッキムはトラブルが多い。日程にゆとりをもたせて登山期間をプレモンスーン期として最大行動可能な4月1日から6月10日として許可を得た。2）ルートの安全確保のため固定ロープは2,000m用意した。3）シッキムの空は変りやすい。気象ファクシミリを持参した。4）本隊は隊員15名と人数が多い。出発前に家族会パーティを開催するなど隊員家族の相互理解を得ることにも心を配った。5）何より高度障害はさけたい。出発前から健康手帳をつくり、体調の自己管理ができるようにした。特に本隊では、佐藤春郎（75）、葛西森夫（73）名誉教授が参加され、佐藤先生はガントクまで、葛西先生はＢＣまでトレッキングの予定である。能勢、山口の両ベテランが二人をエスコートすることになった。

シッキムでの日本隊は昨年、一昨年と連続してツインズで遭難事故をおこしており、その痛ましい報告を読むにつけ、登山隊は緊急事態に対応するために普段から隊内外のコミュニケーションを十分良くすることをおろそかにしてはいけないと感じた。といっても具体的には、キャラバンを含めての登山期間中、翌日の予定と準備について隊長を中心にして食事をとりながらよく話し合い、リエゾンや現地ガイド、ハイポーター達にも確実に伝えるという実に簡単なことなのだが、これは実際にやってみると大変骨がおれ根気のいることではある。

〈トラブル続きのキャラバン〉

4月9日ニューデリー到着早々トラブルにまきこまれる。別送品（アナカン）で送った1.5トンの隊荷を税関で受けとることができないのである。4月1日から法律が変わって私達の隊荷にはなんと80%の関税（3,500ドル）がかかるという。隊荷受取りのため先発していた能勢・保坂・涌沢の3名が奔走して内務省まで行き、特別許可の書類を作成してもらって税関に出向くと、今度はあなたたちの荷物は多すぎると、午後からの通関を拒否されてしまう。悪いことにその夜、元首相のデサイ氏（99才）が死去、翌日からインドは3日間の休日に入って税関は完全に閉鎖されてしまった。又、シッキム州ではストでトラックが動かないという。“This is why India is India.” これだからインドはいつまでもインドなのですよ、といろいろ力になってくれたＩＭＦのアミト・ロイさんに慰められた。でも時間はかかるが何事も辛抱づよく努力すれば解決されるのもインドである。

インドの祭日とも重なり、結局税関が再開されて隊荷を受け取ることができたのは5日後の15日（土）の夜であった。この際、通関料に加えて保管料をなんと30,000ルピーも請求されてびっくりした。何事も解決するにはお金がかかるのもインドである。平



泉と涌沢が暑いデリーで通関にあたっている間に、片山隊長はリエゾンオフィサーとシカールトラベルのワサンと共に一足先にガントクへ飛び、州政府との交渉にあたる。13日には他の12名の隊員もガントクへ出発した。

シッキム州都ガントクのホテルタシデレクに全隊員が集まったのは16日、まちかねた隊荷がデリーから到着したのはその２日後であった。ガントクを出発した19日は、インド外務大臣がシッキムへ来訪するというので市内は大混雑になる。この訪問でガントクから東、古くからチベットへの通商路であったナツラ峠が開放される可能性があるという。長い間閉ざされてきたシッキムも少しづつ変わりつつあるのであろう。この日は警備のため市内の全てのトラック・バスが動員されてしまい、こんどは私達の隊荷を運ぶ車が見つからない。ようやくジープ３台がみつかり１台に８人づつおしこまれて北部最奥の村ラチェンに向けて出発したのは夕方であった。

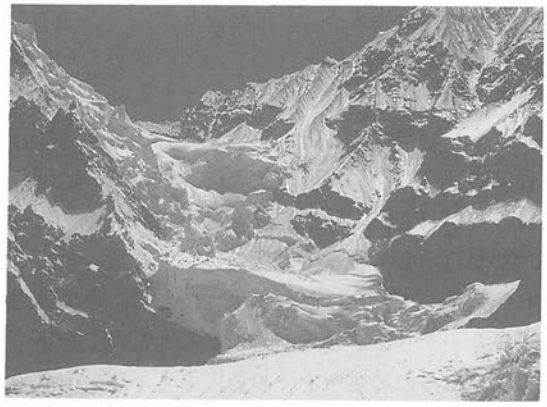
暗闇の中、夕食もとらずに５時間余走ったあとのチェックポストで止められた。土砂崩れのためこの先で道路は閉鎖されており、道が直るまで通れないという。この夜は軍のレストハウスで泊まることになる。インスタントラーメンを皆で分けて食べ、仮眠をとった。

20日早朝から軍のブルドーザーが道を修復し、私達はここを通過することができた。まもなく着いたチュンタンの食堂で食べたオムレツとチャパティの朝食のおいしかったこと。／河口恵海師も通ったティスタ河沿いの石楠花（ラリーグラス）咲く美しい渓谷を北上する。

昼前には懐かしいラチェンのゲストハウスに到着した。ここは空気が澄んで心まで清らかになる桃源境である。まもなくトラックが一台、私達の隊荷の⅔を積んで到着した。残りは明日ガントクに取りに戻るという。一方午後になって、オーストリーのトレッキング隊18名が雨の中到着する。彼らはオーストリー自然保護協会のテントピーク隊に付随してきたトレッキング大部隊であり激しい雨の中、隣のコテージの敷地にテントを張って泊まった。

ラチェンではポーターの人数に限りがあり、70

▼第二アイスフォールの全貌



名程しか集まらない。春は残雪のため、ヤクを使ったムクタン経由の峠越のルートは利用できないので、他隊と日程がぶつかることはポーターの奪い合いを意味する。又、ベースキャンプまでのゼムチュー河沿いのトレッキングキャンプ地は宿泊スペースに限りがあり、両隊がキャンプサイトを同時使用することは難しい。オーストリー隊は予定通り出発するが、ここまで遅れてきた私達は更に遅れて進むことになる。

ポーターの手配をして荷物の到着を待つうちにラチェンには３日間滞在することになった。この間、ゴンパにお参りをして安全登山を祈願するとともに軍の駐屯地を訪問し万一の緊急時の書類手続を済ませておく。又、小学校を訪ねたり、診療所をひらいて病気の子供達を手当てした。

21日夜、ゲストハウスには、キッチンスタッフ、ハイポーターを含めて登山隊全員がそろう。ようやく山へ出発できそうなので隊員にも笑顔がこぼれる賑やかなパーティとなった。

22日、２日間つづいた雨があがる。35名のポーターはオーストリー隊にとられてしまったので残りのポーターを使ってテリンまで隊荷第１陣を送ることにする。まもなくテリンのローナックチュー河を渡る丸太橋は流出していることが判明した。橋がなくてはポーターが通れない。／その上この日はポーターが20名しか集まらず、2.8トン余の山積みされた隊荷を前に頭をかかえる。今後の荷上げのスケジュールが大幅に遅れるので、タクティクスや日程などについて隊員同士夜半まで大議論が続いた。予備の装備・食料などはラチェンにデポするなど隊荷の減量も検討する。丸太橋掛け替

え費用として、オーストリー隊と日本隊で10,000ルピーづつ折半することに同意した。

23日、女性や子供も含めて54人のポーターをかきあつめ3回に分けて隊荷をレストキャンプまでピストン輸送することとし、先発分と後発分に分けて隊荷を整理した。ローナックチューの橋はやはり流されているが古い方の橋が朽ちる寸前であったがかろうじて残っていたのは幸運であった。これを補強して安全に渡れるようにした。今年は雪が多く、テリンから先の道は全んど雪の上を歩くことになるためポーターの負担も大きい。清流のほとり、カンチとリトルシニオルチューをのぞめるテリンの美しいキャンプサイトに2日間滞在しながら余りに遠いシニオルチューの頂に思いをはせた。

25日、次のキャンプ地ジャタンへ向かう中途、後藤隊員が残雪に足をとられて転倒し、左足首を捻挫負傷して歩けなくなってしまった。タフな彼の脱落は痛い。中野隊員は38℃、コックのテラは39℃の発熱をだして横になっている。ガイドのワサンは痔疾がひどく痛んで出血し、坐れない状態だ。ケガ人病人が次々と出て、又頭をかかえる。ジャタンの山小屋は今年の大雪で屋根に穴があき残雪で傾いている。夕方対岸にくまや鹿など野生動物を見る。豊かな自然を思う。

26日、ヤブクに隊荷を送る一方で、テリンに残されている隊荷を上げる。ジャタンより15分程先の流れにかかる橋も流失している。今は残雪があり、スノーブリッジを渡れるので問題ないが、帰りの増水を考えてこの橋もかけ替えなくてはいけない。土台を作り直し丸太を集めて橋づくりである。

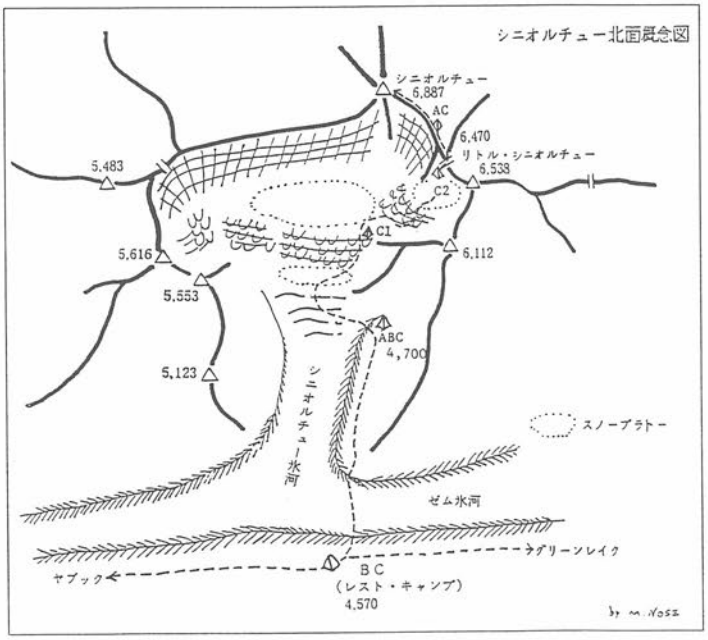
27日、全んど雪に埋まったゼムチュー河を上り、ゼム氷河末端にあるヤブクへ向かう。今日は千田隊員の誕生日である。バースディケーキをつくってのパーティになる。ヒマラヤで誕生日を祝うのは大変嬉しいものだ。負傷した後藤と平泉の両名は荷上げの最後尾にいて3日間ジャタンに滞在する。整形外科医である後藤隊員は、器用に自分用の副木をこしえらえて左足を固定し、少し歩けるようにした。

28日、松木、市川、小山の3名はレストキャンプを往復し、他の隊員は足ならしにヤブクの裏山をかけ上る。オーストリーのトレッキング隊がグリーンレークより下山してきた。私達の女性や子供のポーターは帰して、代わりにオーストリー隊の強いポーターを10名雇う。

29日、BCとなるレストキャンプ（4,570m）に3名が入り、待望のテントを1張りたてた。他の隊員は高度順化のためヤブクからレストキャンプを往復する。

30日、更に隊員8名がレストキャンプへ入り、残雪の多いキャンプサイトにBCを設営する。

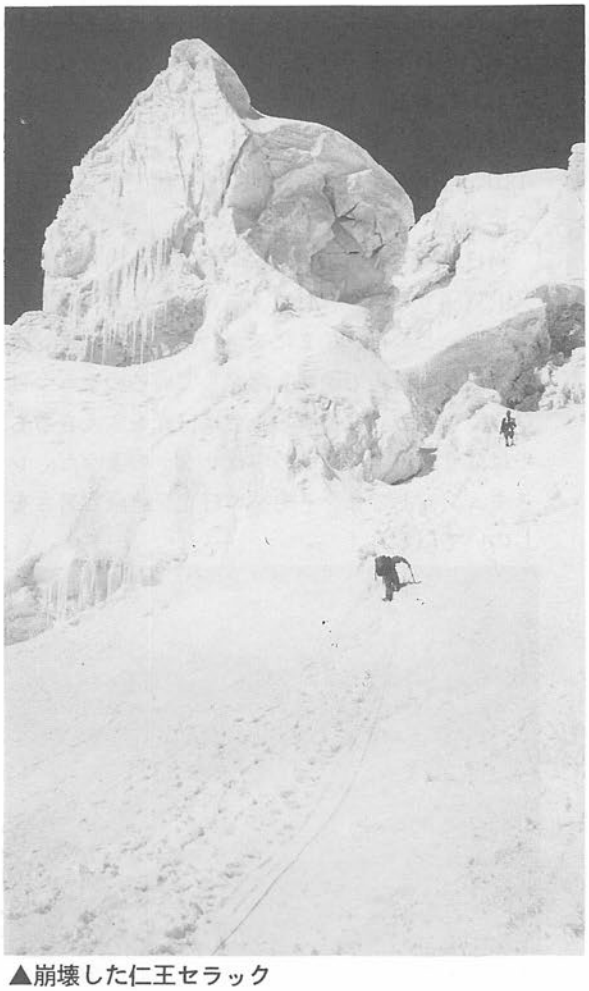
5月1日、松木、千田、太田の3名はゼム氷河を対岸に渡り、シニオルチュー氷河右側のサイドモレーンを登りつめたところにABCを設営する。最後の隊荷がヤブクからBCへ上がり、全隊員、全隊荷がBCにそろったことになる。予定より10日遅れのベースキャンプ開きとなったが遅れも予定のうちである。キャラバンがトラブルつづきでゆっくりだったので、高齢の葛西先生を始め皆元気であり、何より隊員の食欲がすごく旺盛なのは心強い。



〈危険なアイスフォール〉

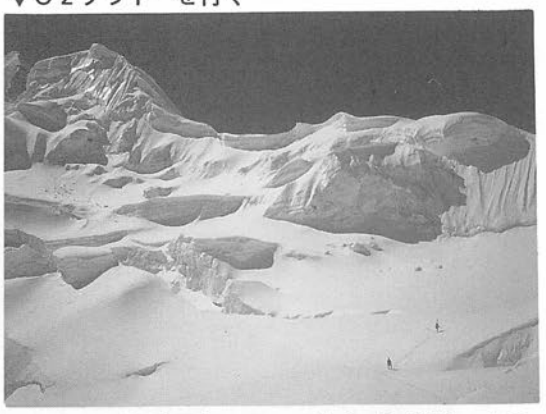
5月2日、松木、千田、太田の3名はＡＢＣよりサイドモレンを下降してシニオルチュー氷河へ入り、第一アイスフォール帯にルート工作。隊員6名とハイポーター4名はＡＢＣへ荷上げ。

3日、松木隊は、第一アイスフォール帯の右側にルートをとり、200ｍのフィックスロープを張って第一プラトーＣ1予定地（5,300ｍ）に達した。保坂、涌沢、中野の3名もＡＢＣ入りする。葛西、山口は元気に歩いてＡＢＣへ到着し、シニオルチューに間近に迫った。葛西先生はシッキムヒマラヤを訪れた最高齢記録を更新したのではあるまいか。(註)この日、テントピークを目指すオーストリー登山隊10名がレストキャンプに上ってきた。片山隊長他3人が彼らのテントを訪ね、トランシーバーの交信時間や緊急時の協力体制について話し合った。又、毎夕ＢＣ間でトランシーバー交信し、各隊の状況や気象情報等を伝えることにした。



▲崩壊した仁王セラック

▼Ｃ2プラトーを行く



4日、保坂隊3名はＣ1へ荷上げ、隊員5名とハイポーター4名はＢＣ－ＡＢＣ間を荷上げする。この日は後藤隊員の誕生日であり、4日間ＢＣに滞在した葛西、山口両先生が帰路につくので、特製のバースディケーキを囲んで楽しい朝食となった。ニグマ、パサンの二人とともに元気に出発した彼らを見送ったあともＢＣでは低気圧の接近で小雨が降りつづく。気温－2℃。

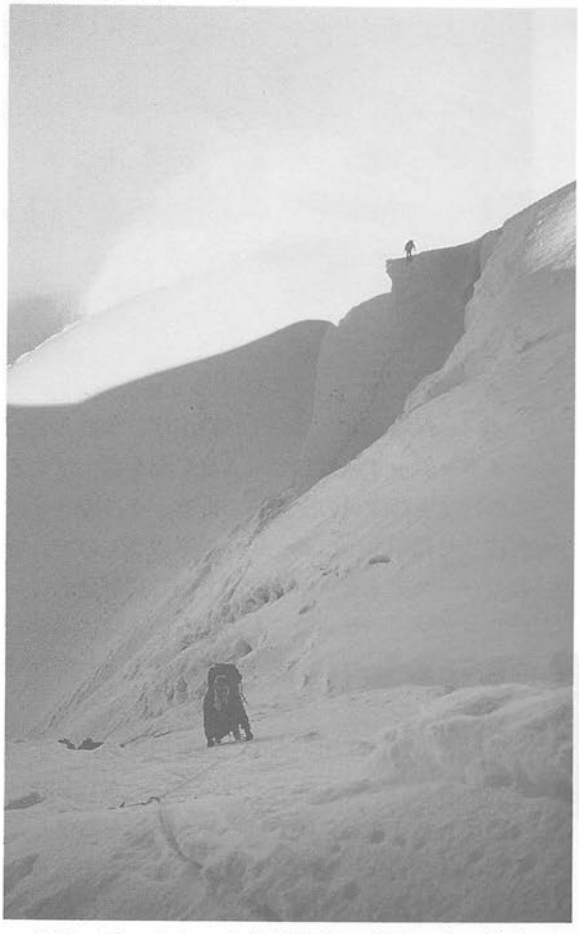
5日、小雪。千田、太田、中野の3人はＣ1へ。4名がＡＢＣ－Ｃ1間荷上げ。ＢＣ－ＡＢＣ間はハイポーター4名に荷上げさせる。足を負傷した後藤はＢＣキーパーを買って出て、トランシーバー交信、望遠鏡、天気図作成、スケッチ等に余念がない。

6日、晴。千田隊はＣ1－Ｃ2間の第二アイスフォール中間地点5,650ｍに達してルート工作。3名がＡＢＣ－Ｃ1間を荷上げ。平泉はリエゾンらととともにグリーンレークのオーストリー隊のＢＣを訪問し一昨年、昨年のツインズ遭難のメモリアルに安全登山を祈る。

7日、晴、ルート工作の千田隊は4時にＣ1を発ち、危険な第二アイスフォールの右側壁にルートをとってトラバースし、13時北西稜コル直下の第二プラトー5,960ｍ（Ｃ2予定地）に達した。ＢＣ－ＡＢＣ間の荷上げは終了し、ＡＢＣ－Ｃ1間の荷上げを続ける。

8日、晴、千田、太田、保坂はＣ2へのルート整備をしＣ2予定地へ到着した。中途のアイスフォールにはクレバスが2ヶ所あり、広がってきたのでワイヤーラダーをわたす。隊員4名とハイポーター4名でＡＢＣ－Ｃ1間の荷上げ。

▼前衛峰をトラバース



9日、雪、C1の5名は休息。小雪の中、片山隊長、松木、市川、涌沢の4名がC1入りして行動隊9名がそろい、C1にはエスパーステント3張りが並ぶ。ABC－C1間は、4名のハイポーターで荷上げを続ける。

10日、晴、昨夜の降雪は15cm程になった。シニオルチュー北面では新雪雪崩が頻発するため、今日はC2への荷上げは中止。ハイポーター4名はABC－C1間の最後の荷上げを行ったあと、いったんBCへ降ろすことにする。BCではガイドのワサンが腸閉塞のため衰弱しており急拠平泉はABCからBCへ下る。

11日、晴、C1を早朝に発ち、千田、太田と保坂、小山、中野パーティがC2へ荷上げする。8時半頃、第二アイスフォール左岸ルートの通称〝への字岩〟にリトルシニオルチュー側から大規模な雪崩が発生し、遅れてここを通過していた涌沢、市川パーティが直撃された。二人ともその瞬間岩陰にいて危うく難を逃れた。つづいてルートに覆いかぶさるように聳え立っていた巨大なセラック（〝仁王セラック〟）が物凄い轟音とともに突然崩壊した。この時上部第二プラトーにいた千田は、「後ろは全員やられた、と思った。」リトルシニオルチュー側から小雪崩が頻発しており、その間隙をぬって隊員はC1へ帰着した。陽がさすと気温が上昇し、第二アイスフォール帯のルートは非常に不安定な状態になる。この状況の中で危険なアイスフォール帯を荷上げのため全員で行動するのは無謀すぎるので、C2への荷上げを大幅に減らしC2往復は最小限とする。又、夜12時起床として暗いうちに危険なアイスフォールを通過し朝までにその日の行動を終えるように変えた。

12日、晴、千田、太田、中野と保坂、涌沢の5名はC1－C2間を荷上げする。1時にC1を出発し、6時半にC2へ到着、朝10時前にC1へ帰着した。BCからC1へハイポーター2名を送り、日本からの手紙、野菜、しょうゆ、酒少々などを差し入れする。

13日、曇、視界もよくないので、片山、松木、小山、市川の4名が中間地点まで荷上げしてC1へ戻る。

14日、曇、千田、太田、中野がC2入りする。又、雪崩で寸断されたC1－C2間のルートを整備する。この日、C2にデポしていたガスボンベが2個直射日光で過熱し爆発しているのをみつけびっくりする。C1から上では日光をさえぎるものはなく、日中テントの中はサウナのようだ。レスキュシートでテントを被い日光を遮蔽し暑さをしのいでいる。

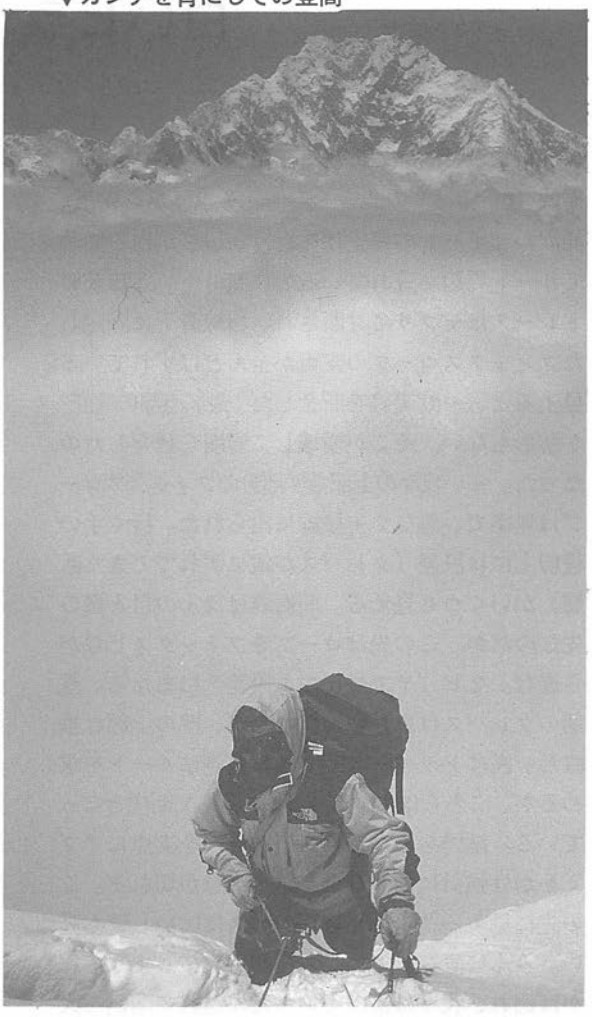
▲シニオルチュー氷河と北部シッキムの山々

15日、ＢＣではこの３日間霧の中で視界がないがＣ２は雲海の上である。千田、太田の２人はＣ２より北西稜のコルへ達すべく出かける。稜線は20～50ｍの雪屁・雪壁が続いている。いくつか弱点を試み昼すぎにようやく雪壁をこえた。保坂、涌沢と市川、小山の４名はＣ２へ最後の荷上げ。

16日、晴れ、昨日頭痛で休んでいた中野が夜半嘔吐する。早朝の脈拍も100を越え高度障害が明らかである。急拠千田、太田がつきそってＣ１へ中野を降ろす。サポートのためハイポーター２名をＢＣよりＣ１へ送る。Ｃ１からは松木、市川がＡＢＣからは平泉が付きそってその日のうちに彼をＢＣまで降ろした。高度が下り症状は改善し、夕食も食べられて安心する。

17日、晴のち雨、千田、太田と保坂、涌沢の４名がＣ１からＣ２へ。ＢＣでは雨となり午後にはキャンプサイトわきの小川が増水して濁流となって渡れなくなる。そろそろモンスーンが近づいているようだ。グリンレークのオーストリー隊は、撤収日が迫っており、ネパールピークまで到達したところで登頂をあきらめ下山を開始するという。私達は登頂予定を21日頃としてアタック態勢に入る準備をする。千田、太田の２名を登頂隊、保坂、涌沢をサポート隊とした。Ｃ１には松木登攀隊長他３名とハイポーター２名、ＡＢＣには平泉とハイポーター２名、各キャンプに隊員を配置する。片山隊長はＢＣへ下った。

▼カンチを背にしての登高



白いピラミッドへ

記：太田尚志

5月18日、晴、この日は千田、太田がC２－前衛峰（6,500m）のルート工作、その後から保坂、涌沢がサポートの荷上げを行う。辺りが白み始めてルート周辺が荒れているのに気付く。３日前のトレースはデブリで寸断され、稜線直下に固定したフィックスロープの支点が全んどはずれている。見上ると、一度突破を断念した“最弱点部の雪庇”が跡形もない。そこが崩壊して雪崩を誘発したのだった。幸い我々の上部雪壁部分のフィックスロープは無事で、難なく主稜線に出られた。行く手の稜線上には段差（クレバスが縦にずれてできた断層）がいくつも見える。前衛峰はほんの目と鼻の先なのだが。この先はロープをフィックスしながら進む。２ピッチで最初の“段差”にあたる。基部のクレバスはまたいで渡れたが、壁の上部は垂直だ。左にトラバースして稜線北側にルートを求めるが、こちらはすっぱりと切れ落ちて断崖となっている。結局もとに戻りスノーバーを支点にアブミをかけ強引に雪壁を乗り越す。息が切れる。この先に見える“段差”はクレバスは広いし壁も高い。みんな直登していたら日が暮れてしまう。急がば廻れ、我々は稜線をいったん離れて南側を大きく巻くことにした。

ダブルアックスで南面側にある60°程の氷壁を20mトラバースし、広い雪壁に出る。遥か足下で雲の切れ間にのぞくパッサンラム氷河は黒々としてなんとも険悪だ。そこからはアックスがきまる爽快な雪壁を60m直上して前衛峰下の樋状テラスに出る。このテラスを右に抜け氷雪ミックスの壁をトラバースする。雪壁40mを直上して前衛峰の肩に出た。13時30分。

辺りはガスにつつまれ時間も遅いので14時40分ルート工作を終え下山を開始する。フィックスを伝って慎重に下る。風が強く、寒くて長い下りとなる。18時帰幕。きつい一日だった。ＢＣとの夜の交信では、気象ファックスによる高層天気図でトラフが近づいていることから明日は停滞することに決まる。

5月19日、C２ではガスの中、小雪が舞う天気。疲れて何もする気になれず、一日中テントの中でゴロゴロする。夕方の交信で、登頂態勢と今後の行動を打ち合わせる。明日は千田、太田で前衛峰先のコル（6,450m）にＡＣを設営、そのまま泊り翌日アタック、保坂、涌沢はサポートにまわりＡＣまでテント・食糧を荷上げした後Ｃ２に戻り、翌日は前衛峰まで登ってアタック隊を迎えることになる。なんとなく気持ちの整理がつかぬまま、長い夜をむかえる。

5月20日、２時起床。満天の星空を仰いで深呼吸をする。疲労は大部回復している。今日は6,400mにＡＣを設営の予定だが、早く前衛峰から先のルートの状況を確めたい。

朝のうちは足もあまり潜らず、フィックスロープを伝って快調に進む。雲海の上で抜群の眺望だ。見慣れた山なみの北方に雪はまばらで、どこまでも果しなくチベット高原が広がっている。７時、前衛峰に到着し初めて頂上までの稜線全貌を見ることができた。前衛峰からはナイフリッジが小刻みに波打ち、ＡＣコルの先で100m程の雪壁となる。かなり険しい。それを越えて傾斜の緩いリッジが小ピークへと延びている。そこには幾筋かの巨大クレバスが縦に走っているのがみえた。天を突くような真白い氷のピラミッドの頂上がその奥に凛然（りんぜん）と構えている。「あれを登るのか」思わずごくりとなまつばを飲みこんでしまう。こんな素晴しい頂上があるだろうか。いつのまにか僕の足はそちらに向って動いていた。

８時ＡＣコルへのナイフリッジのルート工作を開始。取り付いてみると、腐れ雪の中に氷塊が混じっている上に足元がよく崩れるので予想以上に状態が悪い。西側はスッパリ1000mも切れ落ちている。できるだけ重心を低くして、そろりそろりと進む。コルの手前で北側の雪棚に降り、大きく張り出した雪庇の下をトラバースする。それにしても暑くて遮るもののない稜線上ではここだけが日陰となって唯一のオアシスだ。最後のフィック

スロープ100ｍと２本の50ｍザイルを使い切ってようやくＡＣコルにつくが、たった200ｍの水平移動に４時間半もかかるとは。しかしこれで今日の行動が終ったわけではない。サポート隊が帰ったら明日のルートのために、このロープを回収しなくてはいけないのだ。

けだるい午後の陽差しの中を前衛峰まで戻り、保坂、涌沢両隊員と固く握手を交わす。別れ際になって保坂さんが「ちょっとでも危ないと思ったら、もう、登らなくていいよ。」と言う。確かにこの山は我々の力量を越えているかもしれないし、たとえ頂上に立ったとしても、無事に帰らなければ意味がない、と強く思った。15時ようやくロープの回収を終えテントを設営。二人とも疲労困憊でテントに転り込む。

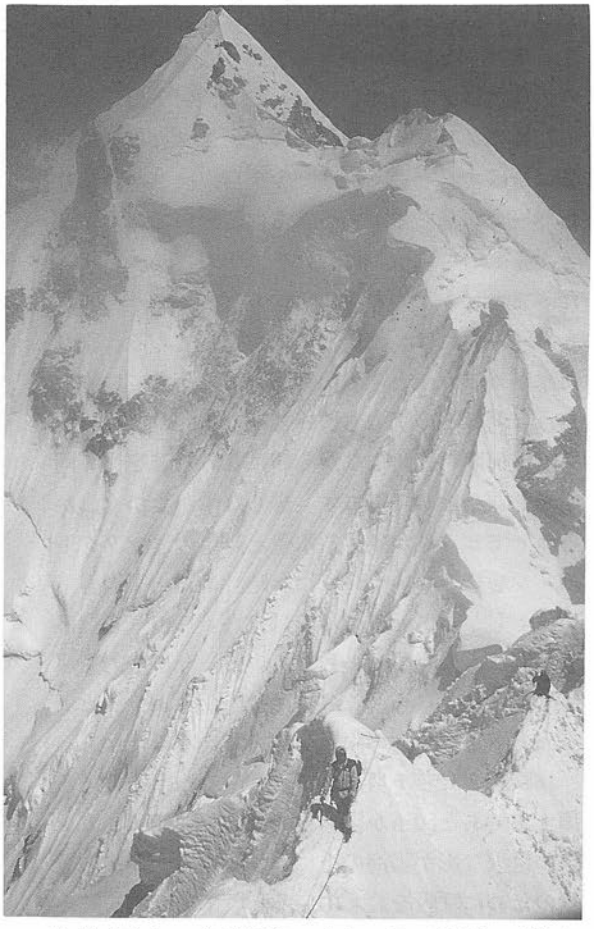
夜、トランシーバーから皆の激励の声を聞く。「ところで、２人の体調はどうでしょうか？」いつものように片山隊長が尋ねる。「疲労はしていますが、元気でーす。」本当は風邪をこじらせて体調はいままでで最悪なのだ。眠る前、祈る気持ちで風邪薬をのむ。

５月21日、日の出を待つ間、松木登攀隊長と行動のタイムリミットを決める。「11時すぎても頂上雪壁の基部に着かないときは引返せ。」了解の返事はしたが、２度もアタックする余裕などない、自分にはワンチャンスしかないのだ、と言い聞かせてテントを出る。

ＡＣから20ｍほど登ったところにアンカーを埋め、太田リードで雪壁に取り付く。最初の幅の広いクレバスは右端の浅いところを下りて通過し、そこから左上気味にぐんぐん登るが、途中から雪壁が青く堅い氷に変り、途端にスピードがガクッと落ちた。持っているのは縦走用のピッケルで、ブルーアイスに、文字通り歯が立たない。予定ではアタック隊のトップはバイルを２本、フォローが１本持つことになっていたが、２人で１本づつしか持たないで来てしまった。サポート隊のを１本借りておけばよかった。しかし、今ないものを望んでもしょうがない。

微妙なバランスで80ｍの雪壁を越え、ダンラインの残り20ｍを続くナイフリッジまで延ばす。これでフィックスロープは使い果たした。そこから

▼北西稜6,500ｍから見た頂上



先は広くなった雪田をスタカットで３ピッチ進み丘状稜線の基部に着く。この先はすぐ垂直の短い雪壁だ。気合いを入れて登り始める。１本目の支点を打とうとアックスに荷重をかけた瞬間、ブツッ、という音とともに身体が宙に浮いた。「だいじょうぶかー。」と千田さんが叫ぶ。頭上の壁に刺ったままのバイルを見て、ビレーのスリングが切れて落ちたのだと解る。朝からテンションが高いせいか、動揺はない。眼鏡の雪を払い落としてから一呼吸おいて、もう一度雪壁に取り付くと今度はうまく乗り越えられた。緩い氷雪壁を３ピッチ登って小さな雪田に出る。ここから稜線は小ピークへと続く。北側の幅５－10ｍの雪棚をすすむ。

11時30分、本峰直下の雪壁基部に辿り着く。山頂までの標高差は約300ｍあるはずだが、思いのほか頂上は近くみえる。最後の難所と考えていた上部露岩帯もどうやら避けて通れそうだ。これならいける。リミットは過ぎているが12時の交信で

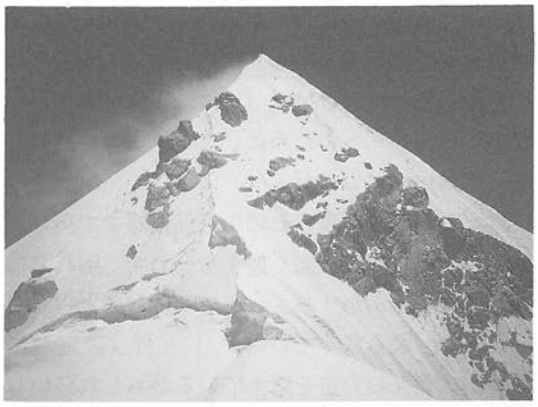
ＢＣにこちらの気持ちを伝えると隊長も引き返せとはいわない。登頂は14時頃になる見込み、と伝え、ポケットにレーションをつっこんで出発。残りの荷物はデポしていく。

初めの２ピッチは傾斜も緩く、スタカットで快調に飛ばす。ところが３ピッチ目以後、がっくりとペースが落ちる。きらきら白く輝いて見えたピラミッドの“雪壁”は、ガチガチのブルーアイスだ。またピッケルが決まらなくなって、バイルがもう一本あれば、と後悔の念が甦ってくる。割れた氷がカラカラと空しい音をたてて落ちていく。もう今朝ほどの腕力も残っていない。「ちくしょう！」何度も絶叫しながら棒になった腕を振り回すが、遅々として進まず。幾らか氷が柔かく、かろうじてピックが刺さる氷壁と露岩のコンタクトラインを登る。いつのまにか時計は14時を過ぎている。しかしあせりや不安はない。この壁を登る前に、二人の意見は一致している。今日全力を尽くしてもダメなら、この登頂は断念しよう、と。二人とももう体力の限界を越えているのだから。

16時、７ピッチ目にしてようやく氷壁を抜ける。頂上まであと50ｍか。あと一息。陽が傾き、カンチの巨大な影が雲海の上に伸びていく。最後の登りのために呼吸を整えていると、下で交信を終えた千田さんが呼んだ。「もう遅い、引き返そう。」「なんで!?」一瞬理解できなかったが、次の彼の言葉でようやくその意味が分った。「ヘッドランプなしにこのルートを下降するのは危険だ。もうすぐ日が暮れる。」今まで気がつかなかったが、うかつにも二人はヘッドランプをザックに入れたまま置いてきてしまったのだ。「10分だけ下さい。ダッシュしますから。」実際、7,000ｍ近いところでダッシュなど出来るわけないが、他に彼を説得できる言葉は見つからない。最後の力をふり絞って、一歩、一歩、頂上への雪稜にステップを切る。視界に白いピークが入ったところで50ｍザイルがいっぱいになった。

16時10分、ついに憧れの頂上に立つ。続いて16時18分、千田さんが到達。実際の最高点は、そこより10ｍ程東側にあるが現地の人々との間で頂上は踏まない約束がある。ＢＣに登頂を伝える。頂上の東側はあいにくガスがかかり眺望はきかない。

▼シニオルチユー頂上ピラミッド



時間も限界だ。お互いの写真をとっただけで休む間もなく下山にかかる。登頂の感動に浸る暇はなかった。ビバークは必至だが、それよりも日没までにこの壁を下りきれるかどうか、太陽とのにらみ合いが続いた。

アプザイレンをしてデポ地に降り立ったのは日没寸前の18時40分。完全に燃え尽きた。もう一歩も動きたくない。このまま寝てしまおうか、とさえ思う。千田さんはビバークの場所に目星をつけていたので、そこまでは行こうと言う。30分程歩いただろうか。稜線から北面を１ピッチ下降したところで水平に開いたクレバスを見つけ、ツェルトを張ってビバーク態勢に入る。二人とも黙ってひたすらレーションをむさぼる。横になるが寒さで眠れず。夜通しトランシーバーから聞こえるみんなの声だけは嬉しく暖かかった。

５月22日、２時半頃からバーナーをつけたり消したりしていたが、我慢しきれず、ツェルトの外に出て硬直しきった身体をのばす。ありがたいことに今日も晴天だ。雲海に浮かぶチョモユモ、カンチェンジャオ、パウフンリが次第に薄紅色に染っていく。カンチが大きい。５時、ビバークサイト（6,640ｍ）出発。滑稽なほどにペースが遅い。今日中にＣ２まで戻らねばならぬのかと思うと余計に足取りも重くなる。とにかくＡＣに戻って一服したい。ＡＣに辿りつくや否や早速、ラーメンを作って食う。死ぬほどうまい。体の芯から暖まり生きた心地がする。ポカポカと暖かいテントの中でいつのまにか二人ともうたた寝をしてしまう。ふと気が付くと時計は８時を回っていたが、すぐ動く気にはなれず、再びバーナーをつけて紅茶を

▼頂上の太田隊員

沸かす。交信でサポート隊がＣ２を出発したのを知って、我々もテントを撤収し、９時10分、ＡＣを後にする。

前衛峰にはすでに保坂、涌沢両名が待っていた。二人の顔を見た途端に、安堵とも歓喜とも、なんともいいようのない感情がドッとこみ上げてきた。「おめでとう、よくやったよ。」「どうも……。」再び、堅い握手を交すことができたが、そのあとの言葉が続かなかった。振り返ると、白いピラミッドの稜線に我々の刻んだトレースが潤んで見えた。そして、これでやっと終った、そう思った。

下　山

５月23日、登頂・サポート隊４名はＣ２を撤収後、朝４時に下山開始。各キャンプの隊員達の出迎えと祝福を受けながら合流し一緒に下山した。同時にＣ１からＡＢＣへ荷下げする。この時、Ｃ１から出迎えに行った小山隊員はＣ１近くでヒドンクレバスに落下する。大事に到らず一同ほっとする。隊員９名とポーター５名は17時30分ＢＣに到着した。この夜は全員がＢＣにあつまってお祝い。考えてみたら全隊員が集ったのはこれが初めてのことであった。24－25日、５名のハイポーターはＡＢＣを往復し隊荷を降す。27日、ポーター70名とともにＢＣを出発、ジャタンを経由し、28日、ラチェンに着く。30日、ガントック着。ダージリンを経由し、６月７日、帰国した。

＊　　＊　　＊

シニオルチューは戦前から知られた名峰であり、ヒマラヤを愛する人なら一度は訪れ目の前にしてみたい山である。フレッシュフィールドは「世界で一番美しい山」と讃え、バウアーは、「その氷のピラミッドを見た瞬間、全地球上にこれに匹敵する山はない、と誰にも憧れをおこさせる」と述べている（“Himalayan Quest”p28）。まさにその通りであり、シッキムの美しく豊かな森の中をこの山へ向けてトレッキングすること、それ自体が十分に楽しい。

２年前にシニオルチューの登山許可取得に成功したＨＡＪ事務局の御好意により、私達は幸運にもこの山に出会うことができた。シニオルチユーは標高7,000ｍにとどかず、未登峰でもないのだが、この山に魅了された私達にとって、それらは余り大きな問題ではなく、むしろ私達の登山を通して多くの方々にまぢかのシニオルチューの美しさを紹介できたことを今はたいへん嬉しく思っている。

（文責、副隊長、平泉　宣）

（編注）1993年９月ＪＡＣの吉田宏氏が80歳でグリーンレイクまでトレッキングしている。

原稿募集

ニュース　ヒマラヤ（高地アジア含む）の各地域の社会情勢・現地事情（入山事情）の変化、日本を含む各国登山隊の動勢、その他気のついた事をお知らせ下さい。ニュースソースも併記して下さい。

紀　行　遠征、トレッキング、旅　etc……。

ヒマラヤ及び高地アジアに関する地域なら何でも結構です。“記録”だけではなく“紀行”としてお気軽に御投稿下さい。400字詰原稿用紙６～８枚程度、写真３～５枚、横書きでお願いします。

日本からヒマラヤから　ヒマラヤ等に出かけた際の印象、現地からの便り、ヒマラヤに関して日頃思っていること何でも結構です。

またヒマラヤ地域へ出かけられる方、計画書をご送付下さい。各方面からの問い合せ用に使用します。

★　投稿は会員、非会員を問いません。採用分には掲載誌を贈呈致します。

★　送り先　〒170 東京都豊島区東池袋４-２-７萬栄ビル501号

日本ヒマラヤ協会機関誌編集部　　TEL 03（3988）8474　　FAX 03（3988）8502

新開禁地域

ラダック南東部3つの山を登る

－1995年夏の記録－

ハリシュ・カパディア

〈概要〉

ボンベイの登山家6名から成る我々の遠征隊は、ラダック南東部マングリク地方を訪れ、ルプシ及びツォ・モリリ湖周辺にて登山、踏査を行った。最近、この地域とレーを結ぶ道路が開通し、一般の人々にとってもオープン・エリアとなった。野生動物達、点在する高山湖、そして数多くの山々等、沢山の魅力にあふれたエリアである。

我々はこの地域の最高峰であるルンサ・カンリ（6,666m）と、チャムセル・カンリ（6,622m）、ラプゴ（6,405m）に登頂した。チャムセル・カンリは2ルートからの登頂である。登頂活動後は、120km余りの踏査を行い、ツォ・カール、スターツァブク・ツォ、タザンクル（タザム）・ツォ等、ルプシの湖を巡った。踏査中に8つの峠を越え、ルプシの殆どの谷を調査する事ができた。

〈地域小史〉

ツォ・モリリ湖は、ラダック南東部のルプシ地域（マングリク）の中でひと際大きな山岳湖である。チャンスパスという名で知られる遊牧民達が、夏の間だけそこにテントを張り、羊の群れを放牧する（羊の毛は、高価で高品質のカシミア・ウールの原料となる）。

数名の著名な旅行家も、過去にこの地を訪れている。ジョージ・トレベック（1822年入域）、トーマス・トムソン（1844年入域）、A．H．フランケ（1909年入域）等である。最近ではロメシュ・バタチャルジー率いるデリーの隊が、1984年と1993年の2回に渡って入域し、この地域初の登山活動をメントックII峰（デリー隊はマタII峰と呼んでいた）にて行っている。この地域のインナーライン入域制限は1994年に解除され、全ての人々にオープンになった。

〈アプローチ〉

6月26日、ボンベイを出発。デリーまで列車で移動。デリーから飛行機に乗り、レー（ラダック地方の中心地）へ。30日までレーに滞在し、高度順化をはかった。ツォ・モリリ湖周辺のトレッキング及び登山許可は、ここで得ることになっているが、簡単に取得できる。ツォ・モリリ湖までは、レーから221km道程だ。快適な舗装道路から、旅は始まる。ウプシ（46km）、チュマタン（76km）を経て、インダス川にかかるマヘ橋（22km）を渡る。ここから道は西に向きを変え、その先のスムドからは南に向かう。ナマシャン・ラ（12km）を越えて、ツォ・モリリ湖の西岸にあるカルゾック村に到着。この地域では、唯一の村である。道路の数ヶ所は砂地で、四輪駆動でないと通過が難しい。カルゾックには小さなレスト・ハウスがあり、レーにて取得した前進許可書の提示を求められる。（ちなみに、スムドで道は二つに分かれている。一方はカルゾック村への道で、もう一つは西へ向かい、ボロゴンカ・ラ、ツォ・カル湖を経てデブリンにてレー＝マナリ道路に合流する。マヘから70kmの道程。ジープ・サファリを楽しむ人々に人

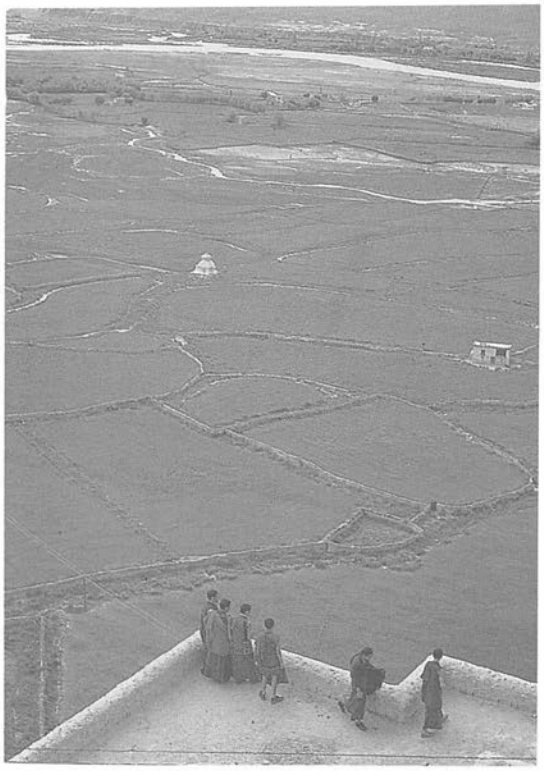
気のオート・ルートでもある。）

我々はカルゾックに２日間滞在し、寺を訪ねたり、隊荷輸送用のロバを手配したりして過ごした。目指す２つの峰は、東岸の向こうにそびえている。以前、この大山塊はタルダ・カルミと呼ばれていたが、カルゾック村では誰もそういう呼び名を聞いたことがないらしい。ラマ僧や村の長老達は、２峰のうちの１峰をルンサ（黄金の山）、もう１峰をチャムセル（崇拝の地）と呼んでいた。川の後方にそびえる峰はラプゴ（祈りの場所）と名付けられていた。ＢＣは、湖東岸を少し上がった、クルチュー（4,945m）という所に設営した。ここは、飲料水が得られる数少ない場所のひとつである。ディヴィエッシュとヴィニート・ムニは、ポーター１人を連れて、ラプゴ川に向けて出発した。彼等２人だけで登る予定だ。モネシュ・デヴジャニは、膝の靱帯の古傷が回復してから、レーに来ることになっていた。

次の２日間はＡＢＣサイト探しに終始し、結局ルンヤドゥ・ブ（5,720m）の上に設営することになった。決め手はやはり飲料水のことだった。隊荷がＡＢＣまで運ばれた。ＡＢＣからチャムセル・カンリの基部まではプラトーを横切らなければならなかった。各リッジを入念に観察し、検討した結果、チャムセル・コルを通る南西稜を取ることになった。７月13日までに、最初の登山に向けての準備は完了した。

〈チャムセル・カンリ（6,622m）第２登〉

７月14日、カパディア、ミストリー、コタリ、ハルシン・Jr.、ケサルシンの５名は、7:30a.m. Ｃ１を出発した。強風が吹き荒れ、非常に寒い。急勾配のモレーンをトラヴァースして、南稜の取付点に到着。南稜を登っていくと雪の斜面に出た。この斜面は南西稜まで続いており、かなり傾斜がきつく、所々凍っている。隊員達はアイゼンを着用し、アイゼンのないポーター達を数ヶ所でビレーしながら登った。11:00a.m. 南東稜上着。そこで我々は、インド測量局のKharasiによって積まれたケルンを発見した。その先傾斜は少しずつ増していき、頂上直下はかなりの急傾斜となった。コタリは頂上150m下でリタイア。残る４人で頂



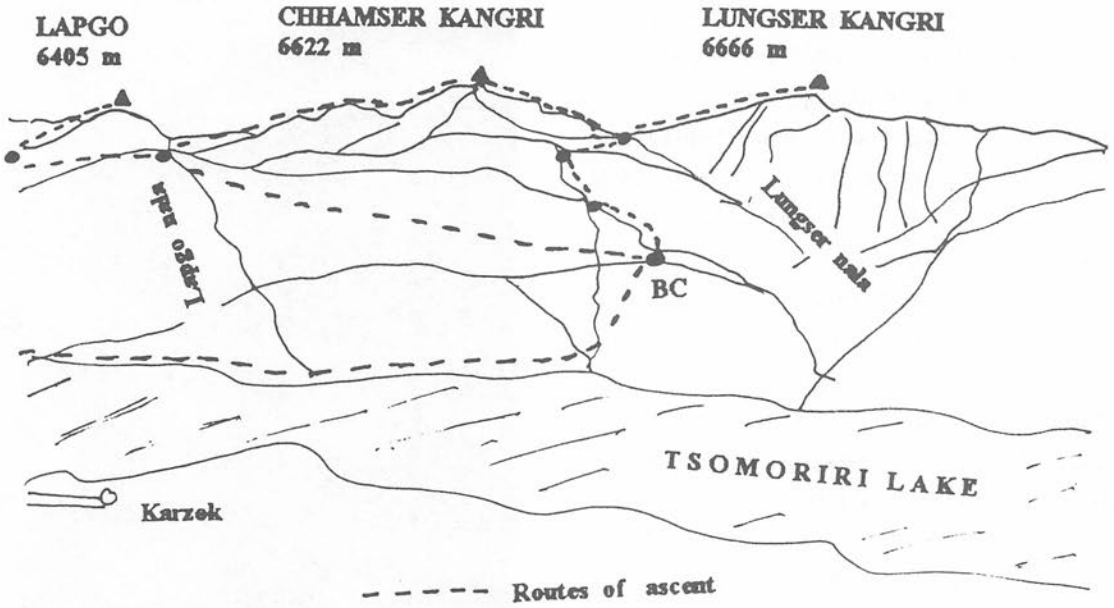
上に立った（13:00）。そこにも巨大なケルンが積まれてあった。頂上からの眺めは素晴らしく、チベット高原、インダス川、そしてツォ・モリリ湖が見渡せた。ケルンに旗を立て、下山開始。往路をそのまま下降に使った。16:00、クタクタの状態でＣ１に帰着。

一方、我々は知らなかったのだが、ムニのパーティも、次の日に我々の取ったルートの反対側からチャムセル・カンリにアタックした。彼等は、７月15日朝、ハイ・キャンプを出発し、北西稜を登った。頂上に近づいた時、ケルンに旗がさしてあるのが見えて、ビックリしたそうだ。頂上に着き、我々のパーティが残したその「土産物」の回収にあたった。これで、我々の遠征隊は、この高峰を別々の２ルートから登ったことになった。

〈ルンサ・カンリ（6,666m）初登頂〉

ルンサ・カンリは、ルプシ地域の最高峰である。７月15日、我々はテントを6,240m地点に移動した（Ｃ２）。前方にはファイナル・コルが望めた。コルからは、北稜が頂上までつき上げている。コタリとケサルシンは、既にＡＢＣへ下山していた。

７月16日6:30a.m.、カパディア、ミストリー、



ハルシン・Sr.、ハルシン・Jr. の４名はＣ２を出発。一旦、ルンサ・ナラまで下ってから、ルンサ・パスまで登り返し（8:30a.m.着）、そこから北東雪面をつめていった。傾斜は緩やかだがクレヴァス帯で、6,400ｍ地点で北稜と合流している。ハルシン・Sr.が一度クレヴァスに落ちたが、ロープにつながっていたので事無きを得た。150ｍの氷壁は、ミストリーがリードした。そこを越えた所が、頂上への最後のスロープだった（6,600ｍ）。しかし、そこからが長かった。最後の60ｍの標高差を1.5㎞という道程でダラダラ登って行かなければならなかった。緩やかな波うねりのようなその斜面は、まるで我々の体力と精神力を試しているかのようだった。1:30p.m.、ついにプラトーの南端に到着、そこが頂上だった。神に感謝！どこにもケルンが見あたらず、我々が初登頂者と確信できた。チュモリ、バレ・チュウとハンドルの大屈曲部の景観は我々にとって最高の報いとなった。西方にはツォ・モリリ湖が見下ろせた。

2:00p.m.、頂上を後にする。２回のラッペルを混じえて北稜を慎重に下降し、5:00p.m.、ルンサ・ナラに着いた。そこからＣ２までの250ｍの登り返しは、疲労しきった隊にとっては拷問以外の何ものでもなかった。２時間半もかかってしまった。おかげで、最終キャンプの設営場所は、登頂者が疲れ切っていることを考慮して、登り返しのない所を選ばなければならない、という教訓を得ることができた。

７月17日ＢＣ着。翌日、馬がＢＣに到着し、カルゾック村へ戻った。ムニ達と一緒に村のレスト・ハウスに泊まり、彼等の冒険談を楽しんだ。

〈ラプゴ峰（6,405ｍ）初登頂〉

予定通りの７月５日、ディヴィエッシュとヴィニート・ムニはＢＣを発ち、本隊と分かれた。目指す山はルンサ山塊の北東の峰々だ。ディワンシンというポーターがサポートのため同行していた。２つの高峰登頂の為に、12日間が費やされた。テントは5,800ｍ地点に張られた。７月10日7:30a.m.、悪天の中、二人は出発した。ラプゴ山頂から派生する北西の斜面を登っていった。雪面が固く、アイゼン着用。12:30、頂上に到達した。45分間そこで過ごして、下山。14:15にテントに着く。

７月15日、今度はチャムセル・カンリの北東稜を登り、（既に書いた通り）インド測量局の積んだケルンや１日前に登頂した我々の旗等を発見して、驚いた。長く厳しい登山期間を終えて、カルゾック村に戻った彼等は、19日レーに向けて出発し、ひと足先にボンベイに帰っていった。

〈北部の湖を踏査〉

カパディア、コタリ、ミストリーの３名は、６日間かけてルプシ北部を125㎞踏査し、その間有名なボロゴンカ・ラを含む８つの峠を越えた。昔の旅行者のように所々で馬に乗って進んだ。愉快で退屈しない乗り物だった。ツォ・カールは、大きな湖で、近くにはトゥジーという名の寺院がある。昔から、この湖では塩の採取が行われている。『カシミール・ラダック地名辞典』では、「塩に被われた広野」となっている。この湖の南には、小さな美しい湖、スターツァブク・ツォがある。古い文献には、これらの湖についての多くの記述が載っている。我々はそこからナクボゴディンを通って、もうひとつの湖、タザンクル(タザム)・ツォにも足を伸ばし、そこからツォ・モリリ湖に戻った。

遠征終盤の天気はあまり良くなく、「ラダックはレイン・シャドウ・エリアである」という一般的ないい伝えは、最早通用しなくなった。既にラダック・プラトーにまでモンスーンは達しており、ラウルの山々も豪雨に襲われ、レー＝マナリ道路は閉鎖されてしまった。我々は帰路も飛行機を使うことにした。７月28日、レーに到着。31日に飛行機にてデリーへ戻り、ボンベイには８月１日に着いた。

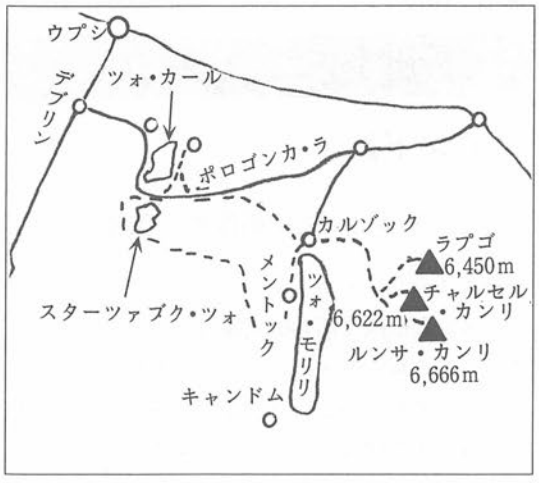
〈野性動物達の楽園〉

今回の遠征は、数多くの野生動物達に出会うことができた。ナンパス（ガチョウ）、スキキャング（ロバ）、プヤ（モルモット）が特に多く観察できた。ツォ・カールでは、チャトゥン・トゥン（鶴科の鳥で、首が黒い）を目にすることができた。これらの他にも数多くの種類の野性動植物達が生息しており、ナチュラリストがこの地を訪れれば、まさにパラダイスのように思えるだろう。

日に２～３台の車が行き来するジープ路が通っているが、鳥達もチャンスパス（遊牧民）達も、平和に暮らしているようだ。カルゾック付近では若干の汚染が見受けられたが、深刻なものではなく、すぐに改善できるだろう。

とにかく最高に素晴らしい旅であった。

（訳：菅原愛里）



山名・高度	登頂日	ルート	登頂者氏名
Lungser Kangri 6,666m 21870ft.	16 July 1995	North	Harish Kapadia Kaivan Mistry Harsin Sr. Harsin Jr.
Chhamser Kangri 6,622m 21725ft	14 July 1995	South West	Harish Kapadia Kaivan Mistry Harsin Jr. Kesarsinh
	15 July 1995	North east	Divyesh Muni Vineata Muni
Lapgo Peak 6,405m・21014ft	10 July	North east	Divyesh Muni Vineeta Muni

会費納入のお願い

本会の年会費は前金制になっております。平成７年度分（平成７年４月１日～平成８年３月31日）年会費は、御案内のとおり8,000円となっておりますので未納の方は、早急にお振り込み下さい。

尚、事務局では「終身会員（会費15万円）」への移項をお願いしておりますので、希望される方は納入金額を15万円と記入されて、通信欄にその旨お書き下さい。

郵便振替番号：00100－６－48954

口　座　名　：日本ヒマラヤ協会

事務所移転募金協力者ご芳名

５口～須藤圭一。３口～野上国広。９月30日現在の累計額は、2,053,500円（敬称略）

地域ニュース

《インド》

ＨＡＪ／労山両隊ヌン登頂

ＨＡＪサマー・キャンプとして実施されたインド、ヌン登山隊（酒井国光隊長ら11名）はカルギルから先のロード・トラブルで２日間足止めを喰い入山が遅れたが、７月30日ＢＣを建設。８月15日にはＣ４を建設し、翌日中川裕登攀隊長と中島清治、阿部訟二、中島俊弥の３隊員が登頂に成功した。同隊は８月31日までに帰国した。

また同時期北西稜に挑んでいた労山隊も８月16日に近藤和義隊長と永田幸一、大藤博司、鈴木博、芥川進隊員が登頂に成功した。

マナ北西峰に初登頂

インドと合同でガルワールのマナ北西峰（7,092m）に挑んでいた山形インド親善ヒマラヤ遠征隊（植松秀之隊長ら５名）は、８月８日西カメット氷河4,500mにＢＣを建設し、上部キャンプ３つを出して、19日午前７時10分に鈴木正典（33）、石川友康（27）両隊員とインド側２名が初登頂に成功し、翌日には佐々木穂高（23）も登頂。

インド大使に谷野氏が就任

新しいインド大使に８月29日付で谷野作太郎氏（59）が任命された。

《中　国》

中国登山協会の新体制決まる

中国登山協会（ＣＭＡ）では、６月新主席として曽曙生（57）氏、常務副主席に李致新（33）、顔金安（43）両氏が就任した。また８月までに以下の新体制となった。

（弁公室）部長：陳尚仁(57) 副部長：王玉勤(51)
（交流部）部長：張江援(42) 営道水(50)
副部長：楊世涛(46) 趙建軍(40) 趙連友(44)
（技術部）部長：于良撲(52) 副部長：陳建軍(40)
（行政部）部長：楊建国(40) 副部長：楊文祥(41)
（登山基地）部長：李中閣　副部長：馬永林
（経済管理部）部長：李舒平　副部長：姚風誠
（雑誌　山野）部長：于良撲　副部長：程文信

日本から自費で登山する場合の「登山許可申請」関係の宛先は「交流部」とすること。尚交流部の住所は「北京市崇文区左安門内大街10号」
電話は7118106＆7117809　FAXは7111629

山形岳連隊崑崙に初登頂

山形山岳連盟が派遣した崑崙山脈登山隊（菅原和明隊長ら14名）は、ホターンを経由して７月28日プル村からキャラバン。31日4100mにＢＣを建設。主峰北壁にルートをのばし８月14日5500mにＣ３を建設。翌日今野一也副隊長（56）と三浦鐵太郎（47）、松原英俊（45）両隊員が初登頂に成功した。尚、主峰を地元ではギシリク・ターク（6,488m）と呼んでいる。山群の位置はヒマラヤ287号を参照。

栃木岳連隊ボゴダに登頂

栃木山岳連盟が派遣したボゴダ登山隊（山形正巳隊長ら10名）は、８月11日にＢＣを建設し北東稜を経由、18日に毛塚勇、片柳紀雄、佐久間利美、舟久保元孝、鍵山恭彦、小松原政彦、伊藤秀明、小林和典の８名が登頂した。尚、登山隊は81年に遭難した白水ミツ子さんが発見されたのを知り茶毘を行い下山した。

立川女子高隊カジセル峰初登頂

コングール主峰の南に位置する未踏峰を目指していた立川女子高校隊（高橋清輝隊長ら14名）は、８月12日午後０時45分、高校生５名を含む11名が初登頂に成功した。同隊はこの山をコングールⅣ（6,650m）と呼んでいるが、中国発行の地図にあるKeziSel（カジセル6,525m）と同一と思われる。

《パキスタン》

シプトン・スパイヤーで遭難

バルトロ氷河周辺にあるシプトン・スパイヤー

(5,800m) に単独で挑んでいた谷口竜二 (29) さんが、山のふもとで遺体となって発見された。

《カザフ》

アクモラに遷都決定

9月9日のロシア公共テレビによると、ナザルバエフ・カザフスタン大統領は、同国の首都をアルマトイからアクモラ (旧ツェリノグラード) に遷都することを決定したと宣言した。

《ネパール》

新首相にデウバ氏

ネパールのビレンドラ国王は9月12日夜、ネパール会議派のシェル・バハドゥール・ドウバ氏を新首相に任命、組閣を要請した。ドウバ氏は1946年6月13日最西部のマハカリ (ダデルドゥラ) 地方生まれの49歳。トリブバン大学卒業。通算9年間も投獄生活を体験。昨年ラナ家出身の夫人と結婚。

ヒマラヤから

サラ・シュワ便り

本年のラダック奥地は雨が多く、レー→マナリ道路も崩れかかったところと、ドロドロになったところが多く、難渋しています。レーも雨が降り続き、デリーからのフライトもキャンセルが続いています。スリナガールへの道路は何とか開通したようです。

明日から山へ入りますが、丁度同じホテルに、IMFのSudahil Sahi氏が泊まっており、旧知の間ですのでXビザの件では、早く知らせるように、また、登山許可があれば日本で発行してもらえるよう働きかけてもらうように強く要請しておきました。何とか登って帰るつもりです。早々

レーにて　沖　允人

ニンチンカンサ便り

7月21日カトマンズ入り、23日よりコダリ、ザンムーへ出発し、土砂崩れや軟弱な道路に苦しみながらニェラムに24日に入りました。25日5,000mの峠を越えてニューシガールに参りました。4,310mのAMSに苦しんでおります。

28日にはニンチンカンサ峰登頂を期してBCを設置します。

7／26中国・チベット学術隊　浅野勝己

インフォメーション

第15回ヒンドゥークシュ・カラコルム研究会の開催について

ヒンドゥークシュ山脈やカラコルム山脈、あるいはパンジャーブ・ヒマラヤのナンガパルバット山などをどう登るか、本年の登山隊の報告と現地情報 (8,000m峰年間6隊制限や登山許可取得)、そしてこの地域の文化について登山の視点から研究する集まり。

日　時　11月25日 (土) 午後1時30分より26日 (日) 12時まで

場　所　八王子・大学セミナーハウス

会　費　12000円 (1泊2食、懇親会費等)

申込み　はがきかFaxに住所、氏名、電話番号を明記の上、10月末日までに〒252藤沢市湘南台2－36－11　広島三朗　Fax0466-45-6801へ申込む

80名で〆切。

東京集会のお知らせ

10月の東京集会はキンヤン・キッシュ隊の報告会です。ふるってご参会下さい。

日　時　10月30日 (月) 19時～

会　場　HAJルーム(地下鉄東池袋下車4番出口)

BOOKS

母なる大空
冬期サガルマータ南西壁

ヒマラヤの８千メートル峰冬期岩壁登攀に執念を燃やし続けてきた群馬県山岳連盟は、初戦にアンナプルナ南壁を選び1984年に挑戦する。しかしよもやの大雪に降られてあえなく敗退。雪辱を期した87年冬には見事な速攻で南壁冬期初登頂を果たす。しかし、下山中に小林俊之と斎藤安平の２名が滑落死亡する。残った登頂者である山田昇と三枝照雄も89年２月冬のマッキンリーで遭難した。

今回のサガルマータ南西壁を冬に登ろうとする計画は、既に84年３月の時点で決定していた。しかし相つぐ事故で中核メンバーを失ったため、外部から補強を行うことにした。折りよくＨＡＪにインドから申し込まれたカンチェンジュンガ登山をプレ登山とし若い隊員の高所登山経験を得ることが出来た。

91～92年はまたしても敗退であった。雪辱を期さねばならない93年本番とプレ登山のチョー・オユーそして栄光。そこに数々のドラマがあり、その報告が詳細に語られている。久々に読みごたえのある報告である。

Ｂ５版　本文384頁　カラー16頁　箱入り
頒価3800円　送料520円
〒371　前橋市元総社町335 G102　名塚秀二

天山山脈　科其咯尔峰初登頂の記

労山の瀬戸内天山カシカール峰登山隊の記録。未知の山を探す楽しさ、地元情報を信じて失敗したこと、初登頂の感激、重度の高山病となった隊員の救出など、1994年初登頂までの経過がコンパクトにまとめられている。トムール（ポベーダ）山群の南に位置する山。この周辺の記録はほとんどないだけに貴重な記録である。

Ｂ５版　82頁　カラー８頁
〒351-01　和光市諏訪原団地２-７-306　山岡人志

特集 秋の彩りを歩く観る味わう
冬の訪れまでのつかの間のあで姿を堪能しよう
花博士・小野木三郎の「紅葉を科学する」
画家・山里寿男の「伯耆大山の秋を描く」
剱・池ノ平、霞沢岳、早池峰山、鳥海山
谷川岳、北八ケ岳、甲武信岳、宝剣・木曽駒
六甲山、大杉谷、紀行・祖母谷温泉の思い出 ほか

まだ見ぬ世界を求めて TRY TREKKING
藤田弘基のフォトエッセー「憧れる」、カンチェンジュンガへ、原始の森に触れるニュージーランド、世界の山岳を見て歩こう、体験記、トレッキングの心構え、ツアー案内

[検証] 沢にひそむ落し穴
欲しかった危機回避の決断（ナルミズ沢）、裏目に出た流れまかせの奇策（トムラウシ川）、臆病さが安全渇行のカギ ほか

ブロードピーク大縦走
無酸素アルパインスタイルで挑んだカラコルムの夢ルート

●特別企画／僕でも登れる？ 38歳からのアルピニストへの道⑥
紅葉の山を撮る 北ア・唐松岳

山の情報誌GAKUJIN
岳人 10月特大号
特価780円(税込)

好評の「夏山号」姉妹編として新登場！
岳人別冊 '95の秋山
全国縦断紅葉山めぐり推奨ベスト18コース、山の温泉めぐり、野外料理大全ほか
定価1000円(税込)

東京新聞出版局(中日新聞東京本社)
〒108 東京都港区港南2-3-13 ☎03(3740)2674

ヒマラヤ登山大量遭難の実態

山森欣一

ヒマラヤ登山は高度との戦いである。山が在る地元の民を除けば、ヒマラヤに登山のためにわざわざ出かけて来る人々は、通常生活している状態よりも圧倒的に低い気圧の中で登山しなければならない。高きが故に人体は様々な影響を受けそれが事故の要因となる。

ヒマラヤは万年雪の世界である。常に雪が支配している世界である。雪と風が多くの事故を引き起こす。表層雪崩、爆風雪崩、疲労凍死等々。雪崩は特に大量遭難をもたらす。

ここでは「大量遭難」として原則として一つの原因で3名以上が死亡・行方不明となったケースをまとめてみた。そのほとんどが「雪崩」であるが、なかには悪天候のため動くことができず衰弱死や疲労凍死に至ったケースもある。地震による43名のケースを筆頭に17名、16名、15名などの大量遭難はテント場ごと埋没したり、流されたりしたものである。このことからも一ヶ所に固ることは避けたいものである。

ヒマラヤ登山大量遭難一覧表

（この表は原則として一原因による遭難で3名以上の死亡を対象としている）

㈱対象は標高6千メートル以上の山。人数の○内はシェルパなどの現地雇用者数。　1995年8月31日現在

No.	山名	標高	国(隊)名	遭難年月日	原因	場所・高度	人数	備考
1	ナンガ・パルバット	8125	イギリス	1895.8.24	行方不明	6200m付近	3②	ヒマラヤ初遭難。ママリー
2	カンチェンジュンガ	8586	英/伊/スイス	1905.9.上	雪崩	C7 6300m下	4③	ヤルンン氷河。パッヘ
3	エヴェレスト	8848	イギリス	1922.6.7	〃	Nコル下	7⑦	マロリーが踏み込んで
4	ナンガ・パルバット	8125	ドイツ	1934.7.中	悪天候	銀鞍下	9⑥	嵐のため下降中、メルクル
5	〃	〃	〃	1937.6.14	雪崩	C4	16⑨	就寝中。
6	K2	8611	アメリカ	1939.7.30	衰弱死	C7	4③	シェルパ3名は行方不明
7	ポベーダ	7439	旧ソ連	1955.8.下	悪天候	6800m～6930m	11	下山したのは1名だけ。
8	レンポ・ガン	6979	イギリス	1957.4.30	雪崩	C4上 6000m	3②	
9	ミニヤ・コンカ	7556	中国	〃 6.13	滑落	6800m	3	登頂後下山中。北西稜
10	バツーラI	7785	英／独	〃 6.下	行方不明	C3上 6850m	5	猟師が6850m付近で確認
11	ポベーダ	7439	旧ソ連	1959.8.	〃	6600m	3	北稜
12	チョー・オユー	8201	国際隊	〃 11.上	雪崩	C4 7100m	3①	クロード・コーガン
13	ポベーダ	7439	旧ソ連	1960.7.18	〃	5600m 上	10	29名が呑みこまれた。
14	ランタン・リルン	7234	大阪市立大学	1961.5.11	〃	C3 5600m	3①	ギャルツェン・ノルブ
15	コングール・チュビエ	7530	中国	〃 6.19	〃	7100m	4	下山中。シーラオ（女）
16	ポベーダ	7439	旧ソ連	〃 8.下		7000m	3	衰退と滑落
17	レオ・パルギャル	6791	インド	1962.6.20	滑落	頂上直下	3②	
18	ダウラギリI	8167	アメリカ	1969.4.28	雪崩	氷河上 5182m	7②	クレバスに丸太架け中
19	ダウラギリIV	7661	オーストリア	〃 11.上	行方不明	C5 6900m	6①	
20	エヴェレスト	8848	日本スキー隊	1970.4.5	雪崩	アイスフォール	6⑥	
21	ダウラギリV	7618	県陵山岳会	1971.5.4	転落	7000m	3	アタック中止下降中
22	ノシャック	7492	ブルガリア	〃 8.下	行方不明		4	登頂後に2名
23	ガンガプルナ	7455	長野県山岳協	〃 10.16	雪崩	C2 5800m	6③	17日に別にシェルパ2名
24	マナスル	8163	韓国	1972.4.11	〃	C3 6500m	15⑩	1日半に2度。安久一成

No.	山　　名	標高	国(隊)名	遭難年月日	原　因	場所・高度	人数	備　　考
25	アンナプルナⅠ	8091	ＪＡＣ信濃	1973. 5 .18	雪崩	Ｃ３～Ｃ４	5①	降雪中の行動中
26	キュンカ・リ	6601	瀬戸水南会	〃　10. 8	〃		3	行方不明
27	プタ・ヒウンチュリ	7246	四日市山岳協	〃　10.12	〃	Ｃ５	3①	テントが悪くなっていた
28	ダウラギリⅣ	7661	イギリス	1974. 4 .19	〃	Ｃ１～Ｃ２	3③	
29	リシパハール	6992	印／ニュジラ	〃　5 .30	〃	Ｃ２　5200m	4	女性合同隊
30	レーニン	7134	旧ソ連	〃　8 . 7	悪天候	7000m	8	女性隊、疲労凍死
31	エヴェレスト	8848	フランス	〃　9 . 9	雪崩	6400m	6⑤	ドヴァゾー
32	ダウラギリⅠ	8167	東京都山岳連	1975. 3 .25	〃	Ｃ１　4500m	5③	就寝中。３名は助かる。
33	ドウナギリ	7066	アメリカ	1976.10.16	滑落	6000m上	4	アタック中止し下降中
34	ジュトマル・サール	7330	東京志岳会	1978. 7 .24	爆風雪崩	Ｃ１　5100m	5②	就寝中テント吹き飛ぶ
35	ガディ・チュリ	8167	ツラギの会	〃　9 .14	懸垂氷河	Ｃ３　5640m	3	1000m上から崩落した
36	ダウラギリⅠ	7871	群馬県山岳連	〃　9 .23	雪崩	6500m	3	ルート工作中
37	ダウラギリⅠ	8167	スイス／仏	1979. 5 .13	雪崩	Ｃ５	3①	ビバーク中
38	ディラン	7257	スペイン	〃　7 .13	〃	Ｃ２	3	登頂し下山中
39	ゴーカール・サール	6249	白河山岳会	〃　7 .27	懸垂氷河	Ｃ１～Ｃ２	6	荷上げ終了し下山中
40	アンナプルナⅠ	8091	アメリカ	〃　9 .19	雪崩	Ｃ４　6500m	3	テントごと吹き飛ぶ
41	エヴェレスト	8848	日本山岳会	〃　10.12	〃	Ｎコル下	3	
42	パタール・ヒウンチュリ	6441	しゃくなげ	1979.10. 9	〃	ＢＣ下　4000m	3①	
43	アンナプルナⅢ	7555	オーストラリア	1980. 3 .下	〃	Ｃ１上	3	
44	ガネッシュ・ヒマールⅢ	7110	愛知ヒマラヤ	〃　10. 9	〃	5600m付近	3	ルート工作中
45	ミニヤ・コンカ	7556	北海道山岳連	1981. 5 .10	滑落	7000m上	7	アタッ中止し下山中
46	ガッシャーブルムⅣ	7980	関西クライマ	〃　7 . 7	雪崩	セラック崩壊	3	ルート工作中
47	コングール	7719	京都カラコル	〃　7 .23	行方不明	6500m上	3	アタック中
48	ホワイト・セール	6446	一橋大学	〃　9 .上	〃	5700m上	3	〃　全員
49	ジャオンリ	6632	同人タンネ	〃　9 .23	雪崩	6000m下	4①	〃　女性隊
50	ナンダ・カート	6611	ＨＡＪ	〃　9 .27	〃	Ｃ３　6000m	7	就寝中
51	アンナプルナⅠ	8091	フランス	〃　9 .27	〃	Ｃ２　5650m	3①	
52	エヴェレスト	8848	カナダ	1982. 8 .31	〃	アイスフォール	3③	
53	ナンガ・パルバット	8125	福岡登高会	1983. 7 .12	〃	Ｃ１　5050m	3	就寝中
54	アンナプルナⅠ	8091	韓国	〃　9 .24	〃	Ｃ２	3②	
55	ナンガ・パルバット	8125	ＨＡＪ	1984. 7 .上	〃	Ｃ３　6700m	4	全員行方不明
56	エヴェレスト	8848	インド	1985.10.11	疲労衰退	Ｓコル	4	
57	ランタン・リルン	7234	アメリカ	〃　10.18	雪崩	4900m	3①	
58	ガネッシュ・ヒマールⅣ	7052	ポーランド	〃　11.上	〃	4900m	3	
59	メルーN	6400	求道心	1986.10.上	〃	取付？	3	全員行方不明
60	ヒマール・チュリN	7540	独／伊	〃　10.15	〃	Ｃ２上	3	
61	Ｋ２	8611	混成	1986. 8 .中	悪天候	南東稜上	5	同じ隊でないが参考まで
62	ガッシャーブルムⅠ	8068	パキスタン	1987. 7 .29	滑落	7000m	4	滑落して雪崩誘発
63	ローツェ・シャール	8400	スペイン	1987. 9 .27	雪崩	7350m上	3	
64	クン	7077	オーストリア	〃　10.中	〃		5	
65	ハン・テングリ	7010	旧ソ／チェコ	1988. 8 .23	滑落		3	

No.	山　　名	標高	国(隊)名	遭難年月日	原　因	場所・高度	人数	備　　考
66	ガンゴトリⅡ	6599	インド	1988. 9 .24	雪崩	C 2 上	6③	
67	エヴェレスト	8848	チェコスロヴ	〃　10.18	転落	8300m (南東稜)	4	南西壁を登り下降中
68	ランタン・リルン	7234	法政大学	1989. 3 .21	雪崩	4900m	3	C 1 へ荷上中
69	コムニズム	7495	旧ソ連	〃　2 .	〃	5700m下	6	
70	エヴェレスト	8848	ポ／国際隊	〃　5 .27	〃	C 1 上	5	
71	プモリ	7161	スペイン	〃　10.13	〃	6400m	4	
72	ヤルン・カン	8505	韓国	〃　12.10	行方不明		3②	登頂後頂上から連絡絶つ
73	ダウラギリⅠ	8167	米／カナダ	〃　12.	〃	6400m	3①	C 3 に登ったまま不明
74	マナスル	8163	アメリカ	1990. 3 .27	雪崩	4720m	3①	C 1 から下降中
75	メルーN	6400	スペイン	〃　5 .			3	全員下山せず
76	レーニン	7134	各国	〃　7 .13	雪崩	C 2　5300m	43	地震のためC 2 周辺埋る
77	トムール	7439	横浜市立大学	〃　8 .12	〃	C 3　5800m	3	C 3 が消えていた
78	マナスル	8163	旧ソ連	〃　10. 6	転落	7000m上	3	ルート工作中
79	メイリ・シュエシャン	6740	中国／京大	1991. 1 . 3	雪崩	C 3　5100m	17	C 3 が埋没した
80	シシャパンマM	8027	ドイツ	〃　5 .22	行方不明	7800m上	4	アタック中
81	アンナプルナⅠ	8091	韓国	〃　9 .19	雪崩	7500m	6④	13時半
82	プモリ	7161	〃	1992. 5 .11	〃	C 3　6800m	4①	登頂後C 3 で就寝中
83	ランタン・リルン	7234	〃	〃　12.18	転落	5600m	3②	登頂後
84	ハン・テングリ	7010	ウクライナ／ポ	1983. 7 .25	雪崩	コル 5800m	4	就寝中
85	〃	〃	カザフ／英	〃　8 . 4	〃	5000m	4	氷河上
86	ニルカンタ	6596	帯広ビスタリ	〃　9 .30	懸垂氷河	6100m	6	アタック中崩落行方不明
87	K 2	8611	ウクライナ	1994. 7 .10	転落	8400m	3	登頂後下山中
88	ミニヤ・コンカ	7556	HAJ	〃　9 .28	雪崩	C 3　5950m	4	行方不明
89	ピサン・ピーク	6091	ドイツ	〃　11.13	〃	5800m	11①	登頂後と思われる

大量遭難人数別遭難

(※印は日本隊)

No.	表No.	山　　名	人数	原　因
1	(76)	レーニン	43	雪　崩
2	(79)	※メイリ・シュエシャン	17	〃
3	(5)	ナンガ・パルバット	16	〃
4	(24)	マナスル	15	〃
5	(7)	ポベーダ	11	悪天候
	(89)	ピサン・ピーク	11	雪　崩
7	(13)	ポベーダ	10	〃
8	(4)	ナンガ・パルバット	9	悪天候
9	(29)	レーニン	8	〃
10	(3)	エヴェレスト	7	雪　崩
	(18)	ダウラギリⅠ	7	〃
	(46)	※ミニヤ・コンカ	7	滑　落
	(50)	※ナンダ・カート	7	雪　崩
14	(19)	ダウラギリⅣ	6	〃

No.	表No.	山　　名	人数	原　因
	(20)	※エヴェレスト	6	雪　崩
	(23)	※ガンガプルナ	6	〃
	(30)	エヴェレスト	6	〃
	(39)	※ゴーカール・サール	6	〃
	(66)	ガンゴトリⅡ	6	〃
	(69)	コムニズム	6	〃
	(81)	アンナプルナⅠ	6	〃
	(86)	※ニルカンタ	6	〃
23	(10)	パツーラⅠ	5	行方不明
	(25)	※アンナプルナⅠ	5	雪　崩
	(32)	ダウラギリⅠ	5	〃
	(34)	※ジュトマル・サール	5	〃
	(61)	K 2	5	悪天候
	(70)	エヴェレスト	5	雪　崩

1995年秋期ネパール・ヒマラヤ登山隊一覧

	山　　名	高　度	ルート	隊（国）名	隊　長　名	隊員数
1	サガルマータ	8,848m	南西壁	韓国	Cho Hyung Gyu	5
2	〃	〃	西　稜	ユーゴスロヴァキア	Radosav Nikcevic	7
3	カンチェンジュンガ	8,586m	北　壁	オーストラリア	Derch Francies Murphy	6
4	〃	〃	南西面	イタリア	Sergio Martani	7
5	〃	〃	南　壁	スイス	Erhard Loretan	15
6	〃	〃	南西面	ガイアアルパイン	小西浩文	4
7	〃	〃	〃	スペイン／アメリカ	Magdalena	4
8	〃	〃	〃	フランス	Yivan Estinne	6
9	ローツェ	8,516m	ノーマル	韓国	Yi Byug Kap	6
10	〃	〃	〃	スペイン	Felix Inurrategi Iriarte	7
11	マカルー	8,463m	北西稜	オランダ	Reinier Zuidhoff	6
12	〃	〃	南東稜	アメリカ	Daniel Mazur	4
13	ダウラギリⅠ	8,167m	北東稜	チーム'84	俵谷久義	7
14	〃	〃	〃	雪豹同人	近藤和美	6
15	〃	〃	〃	宮崎大学	橋本詞央	9
16	〃	〃	〃	スペイン	Pedro Rodriguez Sanchez	6
17	〃	〃	〃	ドイツ	Seigfried Hupfauer	6
18	〃	〃	〃	ベルギー	Borislav Dimitrov	7
19	〃	〃	〃	フランス	Yves Detry	7
20	〃	〃	〃	オランダ	L.A.Bart Vos	1
21	マナスル	8,163m	南東稜	カザフスタン	Kazbok S.Valiev	17
22	〃	〃	ノーマル	カトマンズ・クラブ	金沢健	15
23	アンナプルナⅠ	8,091m	南　壁	フランス	Jean Christophe Lafailk	1
24	〃　Ⅲ	7,555m	西　稜	札幌北稜クラブ	斎藤勤	7
25	〃　Ⅳ	7,525m	北　壁	ドイツ	Pavel Dolecek	9
26	ヌプツェ	7,855m	南東稜	〃	Walfgan Pohl	5
27	〃	〃	〃	〃	Christooph Kruis	5
28	パサン・ラム・チュリ	7,351m	北西稜	韓国	Moon Kyu San	6
29	ジンミゲラ	7,350m	西　稜	農大／ネパール警察	山下康成	12＋5
30	〃　（中止）	〃	〃	日本／ネパール合同	伊丹紹泰	8＋3
31	プモリ	7,161m	南東稜	オーストリア	Hohenegg Reinhard	7
32	〃	〃	南東壁	チェコ	Ivan Fo Ityn	3
33	〃	〃	〃	アメリカ	William Charles Crouse	6
34	〃	〃	〃	〃	Stieven Matous	7
35	〃	〃	〃	イタリア	Orcste Forno	7
36	〃	〃	〃	スイス	Aldo Verzaroli	6
37	〃	〃	南東稜	イギリス	Richard Horsburgh	5
38	ティリッチォ	7,134m	北東稜	アメリカ	Tim Whalan	5
39	ガウリシャシカール	7,134m	西　壁	イギリス	Nicholas Herbart Harper	7

	山　　名	高　度	ルート	隊（国）名	隊　長　名	隊員数
40	バルンツェ	7,129m	南　稜	ドイツ	Andrees Krans	12
41	〃	〃	南東稜	イギリス	Allan Palkington	5
42	〃	〃	西　稜	ロシア	Sergey Efimov	12
43	ドルジェ・ラクパ	6,966m	西　稜	イギリス	Gerard Compion	13
44	アマダブラム	6,812m	南西稜	ドイツ	Rolf Dujmovits	7
45	〃	〃	〃	スペイン	Joseba Mirrene	7
46	〃	〃	〃	ドイツ	Hans Eitel	5
47	〃	〃	〃	オーストリア	Peter Habler	4
48	〃	〃	〃	イギリス	Henry Todd	7
49	〃	〃	〃	ポーランド	Ryszard Pawlowski	2
50	〃	〃	〃	スペイン	Jorge Clariana Gomez	7
51	〃	〃	〃	スイス	Aldo Versaroli	6
52	〃	〃	〃	イタリア	Jshann Kammer Iandee	7
53	〃	〃	〃	フランス	Michel Richard	5
54	〃	〃	南　壁	イタリア	Alfored Malingambi	7
55	〃	〃	南西稜	〃	Arturo Squinobal	7
56	〃	〃	〃	フランス	Bruno Palladini	5
57	〃	〃	北西稜	アメリカ	Pemba Tseri Sherpa	6＋1
58	チョー・ポルー	6,711m	北　稜	福岡県勤労者山岳連盟	山形和敬	6＋6
59	チョラツェ	6,440m	北　壁	フランス	Paul Robach	6

（資料提供：Mr. Kamal Dhoj Joshi）

1996年登山隊員募集

ムスターグ・アタ（7,546ｍ）

シルクロードのド真中、パミール高原にどっしりと腰を据えて聳え立ち現地に住む人々から「氷山の父」として親しまれているムスターグ・アタでサマー・キャンプを行います。なお、アタを舞台としたサマー・キャンプはこの年をもって最後とする予定です。

記

1．期　　間:1996年７月21日～８月25日(36日間)
2．募集人員:10名程度
3．負 担 金:85万円
4．〆 切 り:定員になり次第
5．資料請求先:ＨＡＪ事務局

玉珠峰（6,179ｍ）

世界の屋根である青蔵高原に美しいスノーピークがあります。短い期間で高峰にアイゼンをきしませたいと考えておられる方のために22日間のキャンプを企画しました。（ＨＡＪでは既に２度登頂）

青海省の省都である西寧から西へ約1,000キロ。山中には１週間滞在の予定です。

記

1．期　　間:1996年７月21日～８月11日(22日間)
2．募集人員:10名程度
3．負 担 金:60万円
4．〆 切 り:定員になり次第
5．資料請求先:ＨＡＪ事務局

■ 寸 感 ■

※大量遭難の記録を整理して、いまさらながら雪崩の驚異を思い知らされた。多い実に多い。3名以上でこの数字であるから2名、1名……その実数すらまとまっていない。旧ソ連の実態も完全に知られていないことを考えると数字はもっと増えるだろう。どこが、誰かがやらなければならない。

※同じことは、高度障害の実態についても言える。どんな人物が、どのような高度で、どのような症状に陥ち入り、どのような手を打ち結果はどうであったのか。どこが、誰かがまとめなければ…。

※雪崩や高度障害の実態を必要としているのは、登山者である。登山者自身が命を守って登山するために過去の実態を知り、対策を講じる。そのためにはそれらの集積が必要であろう。

※ある席である人に「登山者がお上の手を借りてはいけない」と云われたことがある。その伝で云えば、登山者側からは文部省登山研修所の存在が否定されることになるのだが。

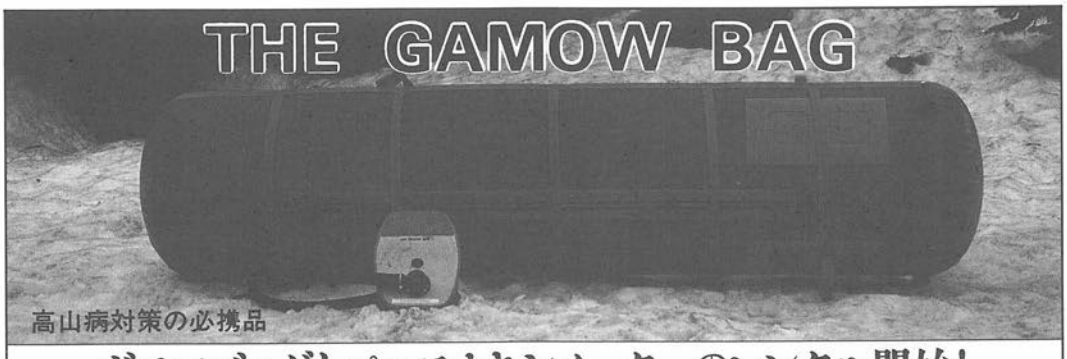
「物言えば唇寒むし登山界」では進歩がない。(K)

事務局日誌（9月）

8日（金）ヒマラヤNo.287発送
　　岳人広告の件、日広通信と協議
17日（日）ミニヤ・コンカ登山隊、渡辺靖之葬儀
　　（静岡、山森、渡辺、高田）
19日（火）終身会員第一次依頼文書発送
21日（木）貫田／古野を励ます会（山森、八木原）
22日（金）住友信託銀行書換え
25日（月）東京集会（22名）

ヒマラヤ No.288（11月号）

平成7年10月10日印刷　　7年11月1日発行
発行人　稲田定重
編集人　山森欣一
発行所　日本ヒマラヤ協会
〒170　東京都豊島区東池袋4－2－7
　　萬栄ビル501号
　　電話　03-3988-8474
郵便振替　00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

●ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ／総重量6.7kg)
●パルスオキシメーター
（血中酸素飽和度測定装置／重量380g／単3乾電池4本使用／携帯型）

総代理店　：　日本メディコ株式会社
レンタル・販売問い合わせ先　：　株式会社 ティ・エッチ・アイ
〒135　東京都江東区木場2-5-7　KHビル7階
TEL：03-5245-0511　FAX：03-5245-0510
（隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。）

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。

Mt. EXPEDITION SHOP

ICI ISHII SPORTS

●登山本店／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
●スキー&カヌー本店／〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
●新宿西口店／〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
●新宿南口店／〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
●神田登山店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
●神田店／〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
●神田ウェアー館／〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
●八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
●アネックス八王子店／〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
●川越店／〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
●大宮店／〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
●高崎店／〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
●松本店／〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
●新潟店／〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330
●新潟プラーカ店／〒950 新潟県新潟市天神1-1 プラーカ3 B1 ☎025(240)2316
●仙台店／〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
●盛岡大通店／〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
●札幌店／〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
●ルート36真栄店／〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
●北十二条店／〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
●2番街店／〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
●旭川店／〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
●外商部(メイルオーダー)／〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219

ICI石井スポーツ

事務所／〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004

TREASURE TOUR

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

——遠征隊、トレッキング、秘境への旅——
あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。

マウンテントラベル株式会社 ☎03-3574-8880
〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F
三井航空サービス代理店2452号

個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク
キャラバンデスク TEL03-3237-8384
～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア

株式会社 西遊旅行

東京本社　〒101 東京都千代田区神田神保町2- 2　新世界ビル5階　☎03(3237)1391(代表)
キャラバンデスク　〒101 東京都千代田区神田神保町2- 2　新世界ビル4階　☎03(3237)8384(代表)
大阪営業所　〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)
カトマンズ営業所　JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU. NEPAL ☎221707
運輸大臣登録一般旅行業607号